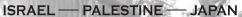


主催 認定NPO法人 聖地のこどもを支える会 共催 中東のための ヨハネ・パウロ II 世財団

Organizer:
CERTIFIED NON PROFIT ORGANIZATION
HELPING CHILDREN IN THE HOLY LAND

JOHN PAUL II FOUNDATION FOR THE MIDDLE EAST



PEACE BRIDGE PROJECT in長野

Project Report

報告書

認定NPO法人 聖地のこどもを支える会

^{共催} 中東のための ヨハネ・パウロ Ⅱ世財団

CERTIFIED NON PROFIT ORGANIZATION
HELPING CHILDREN IN THE HOLY LAND

Co-organizer:
JOHN PAUL II FOUNDATION FOR THE MIDDLE EAST

戸隠高原へハイキング。イスラエル・パレスチナの若者たちは大木の森や神社の伝統的な建物に大感激。 Hiking to the Togakushi Highland, Israeli & Palestinian youngsters were deeply impressed by beautiful nature.





目 次 Contents

謝	辞 Gratitudes	4
4	和宣言 Peace Declaration	6
1	プロジェクトの主旨と概要 Purpose and Outline of the Project	8 9
2	総括 Summary of the Project	10 14
3	準備 Preparations 1. 準備(日本とイスラエルパレスチナで) Preparations (in Japan & in Israel-Palestine) 2. 日本人参加者の事前研修 Preparatory Seminars for Japanese participants 3. チャリティーイベント Charity events	17 19 20
4	プロジェクトの経過 Daily Reports of the Project	22 25
5	収支決算 Balance Sheet	28
6	参加者の声 Feedback from the Participants 青年参加者の声 Voices of the Young Participants スタッフの声 Voices of the Staff 長野からの声 Voice from Nagano	30 44 50
7	名簿 Lists of names	51



謝辞

主催者 認定特定非営利活動法人 聖地のこどもを支える会 と 共催者 NGO ヨハネ・パウII世財団(エルサレム)は、

イスラエル・パレスチナ・日本の若者がつくる「平和の架け橋 in 長野」プロジェクトの計画・実施に際し、 あらゆる面で温かくご支援、ご指導くださった下記の団体及び個人、さらにすべての支援者の方々に対し、 心から感謝の意を表します。

独立行政法人 国際協力機構(JICA) 駐日イスラエル大使館 駐日パレスチナ総代表部 公益財団法人 三井住友海上文化財団

東京都生活文化局 国際市民プラザ 長野県庁

信州善光寺玄證院 長野市ボランティアセンターとボランティアの方々

デイサービスセンターながでんハートネット桜枝町 長野三陽福祉センター

幼きイエス会(ニコラ・バレ) カトリック吉祥寺教会

出川展恒氏(NHK 解説委員) 家田紀子氏(ソプラノ歌手)と瀧田亮子氏(ピアノ奏者)

フランストラベルセンター シャディ・バシイ氏(アルミーナ/アルディワン オーナーシェフ)

ミハル・イラン氏(在イスラエル・サンマリノ名誉総領事)

ナオミ・ファラン氏(イスラエル・モラン合唱団 指揮者・音楽監督)

認定特定非営利活動法人 聖地のこどもを支える会 理事長 井上 弘子

ヨハネ・パウロII世財団 理事長 イブラヒム・ファルタス神父



GRATITUDES

CERTIFIED NON PROFIT ORGANIZATION "HELPING CHILDREN IN THE HOLY LAND", Organizer, JOHN PAUL II FOUNDATION (Jerusalem), Co-organizer of this Project ISRAEL/PALESTINE/JAPAN "LET'S MAKE A PEACE BRIDGE in NAGANO 2016" express their heartfelt gratitude to ALL THE SUPPORTERS, especially,

JAPAN INTERNATIONAL COOPERATION AGENCY (JICA)

EMBASSY OF ISRAEL IN JAPAN PERMANENT GENERAL MISSION OF PALESTINE IN JAPAN MITSUI SUMITOMO INSURANCE CULTURAL FOUNDATION

BUREAU OF CITIZENS AND CULTURAL AFFAIRS

CITIZENS' INTERNATIONAL PLAZA PREFECTURE OF NAGANO

SHINSHU-ZENKOJI GENSHO-IN NAGANO VOLUNTEER CENTER

DAY SERVICE CENTER NAGADEN HEART NET NAGANO SANYO WELFARE CENTER

NICOLAS BARRÉ CATHOLIC CHURCH OF KICHIJOJI

Mr. Nobuhisa DEGAWA (NHK News Commentator)

Ms. Noriko IEDA (Soprano Singer) and Mrs. Ryoko TAKITA (Pianist)

FRANCE TRAVEL CENTER S.A. Mr. Shadi BASHIYI (Owner Chef of Al-Mina/Al-Diwan)

Mrs. Michal ILAN (General Consul of San Marino in Israel)

Mrs. Naomi FARAN (Conductor & Music Director of Moran Choir in Israel)

for their most warmhearted and effective support for the realization of THE PROJECT.

CERTIFIED NON PROFIT ORGANIZATION "HELPING CHILDREN IN THE HOLY LAND" President Hiroko INOUE

JOHN PAUL II FOUNDATION FOR THE MIDDLE EAST President Fr. Ibrahim FALTAS, ofm

平 和 宣 言

私たちは、日本での2週間のプロジェクト「平和の架け橋 in 長野」で、 伝統的な音楽やダンスによる文化交流をとおして、新しい体験をし、多くの大 切なことを学ぶことができました。

共同生活の中で、困難な時にもどのように対話をし、分かち合い、受け入れ合うかを学びました。私たちは、互いに思いやり合ってはじめて、「調和」に達することができることも学びました。そして、互いの過ちをゆるし、バックグラウンドや文化が異なっても相手をありのままに受け入れることができるという体験もしました。こうして、私たちの心はより深い絆で結ばれました。

またイスラエル・パレスチナ・日本からの参加者自身の紛争体験に耳を傾けることによって、互いにどれほど苦しんでいるかを理解し、「譲り合い」の必要性を痛感しました。こうして、私たち参加者の間により深い関係を結ぶことができ、平和の架け橋を築くという、とても重要な目標に一歩近づいたと思います。

今回のプロジェクトのおかげで、私たちはみんな平和の可能性をさらに強く信じることができるようになり、決して平和をあきらめないようにと励まされています。

まもなくそれぞれの国に帰りますが、日本での体験を多くの人々に伝えて、 平和の架け橋となることを決意します。

> 2016 年 8 月 16 日 JICA 東京国際センターにて

ヤラズレイク

まナ・ランティシ

まリアス・ハズブーン

リタル・エルカイム

カッセム・シャリフ

様原裕史

ドニル・ベエリ

Peace Declaration

Throughout the two-weeks project in Japan, "Let's make a Peace Bridge" based on a cultural exchange by traditional music and dance, we had the precious opportunity to gain new spiritual and educational experiences.

The communal life taught us how to share, to unite and to negotiate even during hard times. We have learned that we can reach harmony only if we care about each other. We have also learned to forgive each other, and to accept one another regardless of our different backgrounds and cultures we come from. In this way, we were connected to each other in a deeper level.

Listening to the personal stories or Israeli, Palestinian and Japanese participants about the conflict enabled us to sympathyse with each person's pains, and to realize the necessity of compromising. This experience was helpful for us to create a stronger relationship, and to reach a more important goal which is to build a peace bridge among us.

The experiences we had in this Project have strengthened our belief in peace, and encouraged us to never give up the hope for peace.

We hereby promise to become a peace bridge ourselves, by spreading our experience in the project and the hope for peace to the communities to which we belong.

Domiana JASSER

Lital ERKAIM

Lior LEVI

Dor BEERI

August 16, 2016 At JICA Tokyo International Center

Rana RANTISSI

Elias HAZBOUN

Kassem SHARIF

Domiana JASSER

raji io sivvi io

Mari WATANABE

プロジェクトの主旨と概要 Purpose and Outline of the Project

主旨

本プロジェクトの主旨は、中東和平の一助となることを願って、イスラエル・パレスチナ・日本の次世代の平和の担い手を育成することである。そのため当法人は青少年国際交流事業を2005年以来、広島、長崎、イスラエル、パレスチナで、2011年以降は東北被災地などを舞台に継続してきた。

10回目の節目にあたる今年度は、長野県において

音楽やダンスなどの国際文化交流、ボランティア活動をとおして長野の方々とのふれ合い、「いのちの大切さ」や「平和の喜び」を体験し、また共同生活での思いやりや助け合いの中で、相互受容と信頼のうちに対立や敵対心を乗り越えて心の絆を結ぶことを目的とする。

日程	イスラエル・パレスチナ人: 8月4日から8月19日まで16日間 日本人: 8月5日から8月17日まで13日間
グループ構成	イスラエル人 4名・パレスチナ人 3名・イスラエル国籍パレスチナ人2名 日本の学生 3名 スタッフ 5名(日本人4名、パレスチナ人1名)
活動地域	長野市 (信州善光寺・玄證院) 東京: JICA東京国際センター
プログラム	1) 長野市 信州善光寺・玄證院での共同生活 オリエンテーションとアイスブレーキング 3カ国伝統の歌やダンスの練習 老人ホームや福祉施設などの訪問と交流 善光寺早朝のお勤め参加や禅の体験など仏教の世界を学ぶ ホームステイで日本の家庭生活やおもてなしを体験 長野の大自然の中で、子どもたちやボランティアとの交流とふれ合い 子どもたちとともに長野伝統の「おやき」の作り方を学ぶ イスラエル・パレスチナ・日本の伝統文化交流会 (中東料理も提供) 2) JICA東京でのセミナー 分かち合いとワークショップ:長野での活動体験や文化交流の感想を共有し、紛争の体験を分かち合う。またゲーム、対話、共同作業などを通して、「いのちの大切さ」と 「平和をつくること」について考える。 報告会:「平和の架け橋」を築く者として、被災地やJICAでの活動を報告し、自らの思いや決意を発信する。一般学生や支援者のために報告会を開催し、理解と交流を深める。

Purposes of our Project

The purpose of this project is to cultivate human resources that can contribute to peace in the next generation of Israelis, Palestinians, and Japanese so as to promote peace in the Middle East. Since 2005, our organization has carried out a series of exchange projects in Hiroshima and Nagasaki, Israel, Palestine, and in the Tohoku area after the Great East Japan Disaster in 2011.

This year's project which marks the tenth anniversary

aims to expose the participants to "preciousness of life" and "joy of peace" through international cultural exchange and interactions with the locals in Nagano. Additionally, it encourages the participants to forge a spiritual relationship based on mutual acceptance and trust, which overcomes animosity and conflicts, by learning to care about and help each other in communal life.

Schedule	Israeli and Palestinian participants: 16 days (Aug. 4 ~ 19) Japanese participants: 13 days(Aug. 5 ~ 17)
Group composition	 4 Israelis, 3 Palestinians, 2 Palestinians with Israeli nationality 3 Japanese 5 staffs (4 Japanese and 1 Palestinian)
Place	Nagano City (Shinsyu Zenko-ji, Gensho-in) Tokyo: JICA Tokyo International Center
Program	 Nagano City Communal life at Shinshu Zenko-ji, Gensho-in Orientations and ice-breaks Rehearsals of traditional songs and dances of the three countries Visits to nursing homes and welfare facilities Experiencing Buddhist culture through early-morning service at Zenko-ji and Zen Experiencing Japanese home life and hospitality through a homestay Interactions with local volunteers and children in the great nature Learning how to cook "oyaki," a traditional delicacy in Nagano Three-Country-Cultural Exchange Event (Music, Dance, Middle Eastern food) Seminar at JICA Tokyo Sharing and workshops: Share feelings or experiences of the volunteer activities and cultural exchange in Nagano. Think about the significance of life and construction of peace through games, dialogues, and cooperative works. The Symposium: As constructors of "Peace Bridges", report the activities in Nagano and those at JICA, and convey their thoughts or determination. The symposium is held for general students and supporters, to deepen the understandings and promote exchanges.

2 総括 Summary of the Project



プロジェクトの総括

認定NPO法人 聖地のこどもを支える会 理事長 井上弘子

English Translation: see P.14

はじめに

イスラエル・パレスチナ・日本の若者による平和のための国際交流事業は今年で10回目を迎えた。開催地は広島、長崎、イスラエルとパレスチナ、イタリアなどその都度変わったが、2011年の大震災

から5年間は東北の被災地でのボランティア活動を とおして平和の橋を築くことに力を注いできた。

節目の年となる今年は、長野という新しい活動地を得て、「平和の架け橋」を築く手段として、日本と中東との異文化交流を試みた。それぞれの伝統音楽やダンスによる交流、また全くメンタリティーもことばも宗教も異なる人々との交流と出会い、美しい大自然とのふれ合いなどである。

このように長野滞在と活動が可能になったのも、 信州善光寺玄證院のご好意のおかげ、そして長野で ボランティアとして協力してくださった市民の皆様の おかげである。

プロジェクトは無事に、多くの実りもって終了したが、その準備と実施は決して容易ではなかった。 しかし一つひとつ困難に真摯に向き合うことにより、 目標とする「平和の架け橋」の土台を積み重ねてい くことができるのではないだろうか。

今年も大勢の方々からご支援と励ましをいただい た。皆様への感謝のうちに、ご報告をさせていただ きたい。

1. プロジェクト準備

このようなプロジェクトを立ち上げ準備をし、実施するまでにはいつも大変な時間と労力がかかる。今年も3月の理事会での意志決定から8月のプロジェクト開始まで、実行委員会と事務局、および、現地共催団体とスタッフの懸命な努力が必要だった。

個々の準備過程については、p 17の「事務局準備」 をご覧いただきたい。

2. プロジェクト実施

1) 長野での共同生活·文化交流・ボランティア活動 (8月5日夕方~8月11日朝)

8月5日昼、イスラエル・パレスチナの9人の若者たちが、スタッフのヤクーブ・ガザウィとともに羽田空港に到着した。長旅だったにもかかわらず、憧れの日本に来た喜びと期待で彼らの表情は輝いていた。実は今回は、彼らのイスラエル出国までハラハラの連続だった。出発前夜になってもベッレへムからの参加者の空港使用許可がイスラエル治安当局から、届かなかったのだ。急遽イブラヒム神父に連絡し、夜遅くまで掛け合ってもらって何とか早朝のフライトの出発に間に合った。離陸10分前に搭乗ゲートに駆け込むことができたそうだ。

さて東京駅で、日本人参加者およびスタッフが合流し、新幹線で長野へと出発した。宿泊所は善光寺玄證院。住職の福島貴和師は当 NPO の理事でもあり、このたびの長野でのプログラム作りと実施に

全力で関わっていただいた。

平和のための祈り

長野での生活は、「平和のための祈り」から始まっ た。到着の翌日は「広島原爆投下71年目」、テレビ で放映されていた平和祈念式典にあわせて、すべて の戦争や紛争の犠牲者のために黙祷を捧げた。ま た原爆についてビデオで学び、折り紙で鶴の折り方 を学んだ。また一人ひとり思い思いのデザインで平和 を願う「うちわ」作りも体験した。

共同生活

20歳から25歳までの若者たち。パレスチナ人4名、 イスラエル人4名、イスラエル国籍のアラブ人1名、 日本人3名。スタッフ5名を加えて総勢17名の共 同生活が始まった。文化も習慣も異なる日本で、し かもお寺の宿坊で、畳の部屋に布団を敷いての雑魚 寝生活。慣れない食事や共同生活の規則など、戸 惑うことはいろいろあっただろう。

そして共同生活にもちろん慣れていない若者たち、 小さなわがままやいらだち、不満や怒りがなかった 訳ではない。時間を守れない者や、スマホに夢中に なって仲間とコミュニケーションを取ることが難しい 者。中には、こんな連中とともに住むのは不可能!と いって折れそうになったメンバーもいる。しかし、互 いに忍耐し、受け入れ合い、協力せざるをえない生 活をとおして、次第に「平和共存」は可能だというこ とを肌で感じることができたのではないだろうか。

イベントで披露する合唱とダンスの練習。中には 経験者もいるが大半は全くの素人だ。にもかかわら ずみんなで助け合いながら挑戦した。それぞれの国 の伝統的な歌やダンスは大変だったが、それでも若 者たちはハーモニーをつくりダンスの表現に取り組ん だ。その厳しい、難しいそして長時間の練習を通して、 互いの国の文化を多少とも味わい、心の一致を生み 出すことが目的であった。

文化交流

若者たちが大自然の美しさを味わい、日本の文化 の素晴らしさや人の心の温かさに触れる活動ができ たのは、長野市ボランティアセンターを介して集まっ て下さった多くのボランティアの方々のおかげだ。

戸隠高原など遠出をする時には、グループの足と して車を出して下ったり、善光寺の「びんずる祭り」



無事に羽田空港に到着。プロジェクトへの期待に輝いた表情で。 Arrival at Haneda Airport of the members from Israel and Palestine: they were exciting with expectation of the Project.



全員ゆかた姿で、いざ『びんずる祭り』へ。それぞれ手製の平和を願う うちわを持っている。

They are going to take part in the Zenko-ji Festival in Yukata.

に参加するために浴衣の着付けを手伝って下さった り、飯綱高原で大人や子どもたちと一緒に楽しむイ ワナ釣りやバーベキューに参加させて下さったりした。

善光寺早朝のお勤め参加や「禅体験」は、若者 たちにはとても新鮮で感動的だった。人間の真の幸 福探求の一つのかたちを垣間見ることができたにち がいない。

さらに、ホームステイ先での温かいもてなしのうち に感じ取った家庭生活、老人ホームのお年寄りたち とのことばの壁を越えた心の交わりのひととき、福 祉センターでの長野伝統料理「おやき」の実習など、 たくさんの市民や子どもたちの笑顔と触れあうことが できた。

11日に行われたイベント「平和の架け橋」国際交 流の集いでは、長野市民の方々80人以上の参加し

てくださった。若者たちは一生懸命練習してきた3 カ国伝統の歌とダンスを披露し、イスラエル・パレス チナの手作り料理も味わっていただいた。さらに地 元の合唱団「カント・キアラ」やゴスペルグループ、 ハンドベルグループなどの演奏も加わり、すばらしい 「国際文化交流」の催しができた。ご出席の方々が、 若者たちが歌う「さくら」や「富士山」や「浜辺の歌」 に声を合わせて心を込めて歌って下さった時は非常 に感動的だった。この交流会をいろいろな形で盛り 上げてくださった方々に心からの感謝を申し上げる。

さて、長野でのすべての活動を終えて、12日、 高速路線バスで東京へ向かった。

2) JICA東京国際センターでのセミナー (8月12日~17日)

JICAでの活動目的は、長野で培った互いの信頼 関係をもとに、対話や分かち合いをとおして、互い の間に「平和の架け橋」を築き続け、平和への道筋 を見出していくことである。

対話と分かち合い

最初の活動は「長野での活動の振り返り」だった。 若者たちの反応はほとんど同じだった。先ず大自然 の美しさと、人の心の温かさやお年寄りや子どもた ちの笑顔に感動したこと、そして日本の文化、伝統、 習慣、メンタリティーと、自分たちのそれとのあまり にも大きな違いに驚いたこと。共同生活は楽しかっ たけれど厳しい面もあり、共に生きるために必要な ことをいろいろ学んだこと。それにもかかわらず同じ 人間として心を通わせることが出来たことだった。

次に「紛争の個人的体験」についての分かち合いをした。互いに最大の尊敬をもって心を開いて聴き合うこと、それが条件である。子どもの時に両親と住んでいた家がイスラエル軍に破壊され、しかも妹のようにかわいがっていた従妹が犠牲になったこと、あるいは爆弾を持ったパレスチナ人「テロリスト」がすぐそこにいると聞いて、恐怖と不安に駆られて逃げ出したこと、検問所で何時間も待たされたあげくひどい目に遭わされたことなど、みんな心の奥底に秘めていた辛く悲しい、あるいは口惜しい思い出が次々と出てきた。それは、今はもはや信頼を持てる仲間同士となったからこそ口に出せる思いやことばであった。そして聴く側も今までは想像もしなかった相手方

の「痛み」を共有することができる。こうして新たな 相互受容、相互理解の関係を築くきっかけとなった。

ワークショップとゲーム

平和をつくる基礎となる「赦しと和解」に関するワークショップ、「イスラム教、ユダヤ教、キリスト教の平和と愛に関する考え方」に関するワークショップなどを行った。最後には、恒例となった「絆」ゲームもした。この2週間の間にあった互いのわだかまりを取り除き、互いに感謝を表明するゲームである。

*(荷造り用の紐を準備し、全員が一つの輪になって、もし誰かが誰かに対して感謝や感動していることがあれば、理由を説明しながら、その相手に紐を渡し、また渡された人が他の誰かに別の理由で紐を渡していくというゲーム)

レポートと平和宣言作成

自分がこのプロジェクトに参加して得た実りは何かについてそれぞれがレポートを書き、それをもとにみんなで考えて「平和宣言」を作成し、全員がそれに署名した。これからも「平和をつくる人」として働き続けるという決意をしてくれたのである。(p6)

報告会

支援者の方々への報告会は8月16日の午後に行った。残念ながら、その日は平日であり、また学生たちは夏休み中であったので、今年も出席者は非常に少なかった。

第1部:プロジェクトのプレゼンテーション。それぞれの自己紹介をし、プロジェクトの感想を述べたあと、3つのグループに分かれ、パワーポイントを使って活動報告。長野での国際文化活動や人々との心のふれ合い、共同生活、またJICAでの対話や分かち合いなどをとおしてこの2週間各々が何を学び、何を感じたかを話した。そして日本人参加者の一人がみんなで作り上げた「平和宣言」を読み上げた。

第2部:出席者を交えて3つのグループに分かれて、ディスカッションを行った。イスラエル・パレスチナの若者たちは、紛争の体験や、自分たちの平和への望みについて語り、またこのプロジェクトで結ばれた友情をこれからも大事にしていく決意を表明してくれた。



ワークショップの一コマ (JICAにて) A scene of a workshop in JICA.

第3部:最後は文化交流。心の一致の証しとして 今まで練習してきた伝統の音楽やダンスを披露。決 して完全ではなかったが、一生懸命さが伝わった。 最後は全員参加の盆踊りで終了した。

終わりに

「平和とは何か」について論じるより、「平和をつくる」こと、「平和を体験する」ことを目的とするこのプロジェクト。果たしてこの2週間の間にあらゆる点で多様性に富んだ若者たちの間に「平和の架け橋」は築けたのだろうか?

自国では、自分の中にも、周囲にも相手への敵対 意識があって、自由に会うことも話すこともままなら ない若者たちが、遠く離れた日本に来て2週間をと もに過ごし、文化交流と共同生活をとおして「平和 共存」の体験をする。それは彼らにとって大きなチャ レンジだったにちがいない。

先ず始めて来日した彼らのカルチャーショックは大きかった。大自然の美しさに感動し、日本文化の体験や日本人との交流で「ワンダフル!」を連発しながらも、習慣やメンタリティーのあまりの違いに直面して驚きと戸惑いを隠せなかった。そんな彼らの結論は面白かった。「なんと言っても、僕らイスラエル人とパレスチナ人は、似たような文化やことばや習慣を持っているではないか? つまり僕らは兄弟ではないか? それならもっと話し合って、分かり合って平和への道を見出せるのではないか?」これを聞いた私はとても嬉しかった。それこそこのプロジェクトが目標としていることの一つなのだから。

また不自由な共同生活や、音楽やダンスの厳しい

練習の中で、いろいろな困難を乗り越えて協力し、一つの調和、ハーモニーを生み出していく過程の中で、彼らは多くのことを学び実感した。小さないらだちや不満があっても、心を開いて相手をありのままに受け入れ、ゆるしあう事によって、はじめて「友」となれるということを。彼らが、一人ひとりの大切さやかけがえのなさを、たとえ不完全でも、体感してくれたことを心から喜ぶ。

平和宣言の中で、若者たちは、帰国したらなるべく多くの人々に、日本での「平和共存」の体験を伝える決心をしている。実を言えば、現在も紛争が続くなかで、それは容易いことではないだろう。今もイスラエル・パレスチナの間での敵対感、不信感は増すばかりだからだ。しかし、彼らは決してあきらめずに、勇気をもって、「人が人として向き合えば、必ず紛争解決の糸口が見つかる」ということを、実体験から力強く、粘り強く語ってくれることを願っている。

幸いなことに、当法人の青少年国際交流事業(夏のプロジェクトと春のスタディー・ツアー)に参加した若者たち(イスラエル・パレスチナ人:約120人、日本人:約90人)の多くは、いろいろな形で国際貢献の道を進んでいる。彼ら一人ひとりの心の中に蒔かれた平和の種は、必ずどこかで芽吹き、いつの日か多くの実を結ぶ大木に成長してくれるにちがいない。そうすれば、平和への道は決して閉ざされることはないと確信している。

終わりに、本プロジェクト「平和の架け橋 in 長野」の準備と実施にいろいろなかたちでご支援、ご協力くださったすべての方々に、心かの感謝を申し上げたい。

Summary of the Project

Hiroko Inoue

Chairperson of Certified non-Profit Organazation "Helping Children in the Holy Land"

Introduction

The international exchange project among Israeli, Palestinian and Japanese youths have marked the tenth anniversary this year. The sites where these projects were held until now varied from year to year, from Hiroshima, Nagasaki, Israel, Palestine, and to Italy, but our main focus since 2011 has been the establishment of a "peace bridge" through volunteer activities in the afflicted area in Tohoku.

This year's project as an important milestone aimed to build a "peace bridge" through intercultural communication between Japan and the Middle East in Nagano. The interactions encompassed wide range of aspects: traditional music and dance, encounters with people from distinct cultural heritages, and exposure to the great nature.

We were able to carry out this project in Nagano because of the kindness and hospitality of Shinshu Zenko-ji Gensho-in and heart-warming cooperation by the local volunteers.

The project ended with a great success, but the path of preparation was not easy. However, sincerely facing with each hardship is the key to build a foundation for our "peace bridge."

We have received support and encouragement from numerous people. I would like to deliver this overview as a way to show my appreciation to them.

1. Preparatory Period

The Project Start

For several reasons, the preparation began Preparing and implementing a project like this always require immense effort and time. This year, as usual, also necessitated the committee, the office, and local organizations to do a lot of work from the board's decision to hold this project in March until the implementation in August. Please refer to "Preparation at Office" at page ···.

2. Implementation of the Project

1) Communal life, intercultural communication,

and volunteer work in Nagano (evening Aug. 5 ~ morning 11)

On August 5th, nine youths from Israel and Palestine arrived with one of our staffs, Yacoub Ghazzawi. Despite the long travel, they looked very happy, full of joy and expectation for the project in Japan. Telling truth, there were numerous nervewrecking moments in prior to their arrival. The permission from the Israeli security authority for accessing the Tel Aviv airport had not arrived to the participant from Bethlehem by the night before departure. He finally got his permission early in the morning after Father Ibrahim's huge effort of negotiation. I heard that he rushed through the departure gate ten minutes before the departure time.

Participants from the three countries and staffs met for the first time at Tokyo station, and left for Nagano by Shinkansen. Our accommodation was Zenko-ji Gensho-in. Kiwa fukushima, the chief priest, who is one of the boards of our organization, has played a highly significant role in planning and carrying out the program in Nagano.

Prayer for Peace

Life at Nagano began from a "prayer for peace." August 6 marked the 71th anniversary of the atomic bombing in Hiroshima. We held a time for a silent prayer accordingly with the Memorial Peace Prayer Ceremony which was broadcasted on TV. The participants learned about the atomic bombing by watching a video, and learned how to make a paper crane. Also, they made fans that symbolize peace for themselves.

Communal Life

The participants were youths from the age of twenty to twenty-five. Four Palestinians, four Israelis, one Arab Israeli, and three Japanese. The communal life began with these twelve youngsters and five staffs. The communal life must have been full of novel experiences for the foreign participants: distinct cultural habits, sleeping all together in one room at a temple. Some were surely perplexed with unfamiliar food and various rules.

There were some occasions where selfishness, irritation, dissatisfaction, and anger were revealed. There were some who could not be punctual or who were so consumed to their smart phones and consequentially lacked communication with their peers. Some participants were very desperate to escape from living together with some of other participants. However, the participants gradually learned that "peaceful coexistence" is possible by going through a life experience together, where they had to tolerate, accept and cooperate with one another.

Not all of the participants were comfortable in singing and dancing. In fact, majority of them were complete beginners. Despite the difficulty, they helped each other and tried hard. Learning traditional songs and dances from different cultures must have been difficult, but they made a great effort to create beautiful harmony and dance expressions. The goal of this activity was to nurture a sense of unity and taste distinct cultures by undergoing tough practices together.

Cultural Exchange

We appreciate the great effort of the local volunteers in Nagano, which enabled the youths to experience the beauty of the nature, amazing Japanese culture and the warmth of human heart.

They willing supported us by driving the group to Togakushi highland, helping the participants wear yukata for the Binzuru Festival at Zenko-ji, and letting us participate in trout-fishing and barbecue at lizuna highland.

The early morning service at Zenko-ji and Zen experience seemed to be novel and impressive to all the participants. They could get a glimpse of a form of pursuing happiness.

Additionally, they enjoyed a heart-warming hospitality from home-stay experience, pleasant interaction with elderlies at the nursing home, learning how to cook "oyaki," a traditional food in Nagano, and communication with a lot of adults and children.

There were more than eighty people who attended the "Peace Bridge" international communication event on 11th. Young participants showed the traditional songs and dances from the three countries that they had been practicing. We also offered Israeli and Palestinian food. The intercultural event was even more invigorated by the participation of a local chorus group "Canto Chiara," a gospel choir and a hand-bell choir. It was very

moving to see the audience sang along with the participants' performance of "Sakura," "Fujisan" and "Hamabe no Uta." I would like to tell my deep appreciation to all who brought excitement to the event.

After having finished the activities in Nagano, we moved to Tokyo by bus on 12th.

2) Seminars at JICA Tokyo International Center (August 12~17)

The purpose of the activities in JICA was to keep on building a "peace bridge" among the participants and to discover a path leading to peace through dialogue and mutual-understanding based on the mutual-trust they nurtured in Nagano.

Dialogue and mutual-understanding: Our first activity was reflection on the activities in Nagano. All the participants had similar impressions. They were impressed with the beauty of the great nature and the warmth and smile of the elderly and children. They were also astonished by the huge difference between their own culture, traditional, habits, and mentality and those of Japan. They learned a lot about living together and about reaching out to each other through fun, but challenging communal life experience.

Next, we did a sharing of personal conflict experiences. The only rule was to listen to one another's stories with an open heart and an utmost respect. Participants shared their tragic memories that they had kept deep in their hearts for a long time: one's house being bombed by Israeli Defense Force, losing a cousin whom he cherished like a real sister, running in great fear after hearing there was a Palestinian suicide-terrorist, waiting for hours at the checkpoint just to get hurt···. Those words came out of their mouths because there was an established trust among the participants. The listeners could empathize with the unimaginable pain of the speaker. The sharing became a cornerstone for building a relationship of mutual acceptance and understanding.

Workshops and Games: We held a workshop on forgiveness and reconciliation, a workshop on concepts of peace and love in Islam, Judaism and Christianity, and annual "kizuna" game. "Kizuna" game is an activity to express one's appreciation without any ill feelings. (Passing around a ball of string by expressing one's gratitude to another person.)

Report and Declaration of Peace: All participants



デイサービスセンターながでんハートネット桜枝町で心温まる交流 Heart-warming communication with senior persons in the Heat-Net Day-Service Center.

wrote a report on what they gained from the project. Declaration of Peace was generated based on these reports, and was signed by each one of them. They all showed their determination to continue working as "peace makers." (For the Declaration of Peace, please refer to p···.)

Symposium: We held a symposium that addressed our supporters in the afternoon of August 16. Regrettably, there were very few audience because it was a week day and lot of students were away for summer break.

Part One: Presentations of the project. Participants first introduced themselves and spoken their impressions about the project individually. Then they were divided into three groups and each group explained the contents of the project using power points. They talked about what they learned and felt through interactions with people in Nagano, communal life, and dialogues and sharing at JICA. Finally, one of the Japanese participants read the Declaration of Peace out loud.

Part Two: All the participants and audience were put into mixed three groups and had a discussion session. Israeli and Palestinian participants confessed their experiences of the conflict and their hope for peace. They also expressed their determination to keep the friendship they established during the project.

Part Three: The final part was cultural exchange. The participants performed the traditional dances and songs they had been practicing as a token of unity. Their performances were not perfect, but audience surely felt their eagerness. We closed the symposium by dancing bon-odori all together.

Conclusion

This project purposed to "build" and "experience" peace rather than to discuss what peace was.

I wonder whether a "peace bridge" has been constructed among the diverse participants.

These youths did not have any chance of interaction back home because of animosity among and within themselves. They were brought to a remote country, spent two weeks together, and experienced "peaceful coexistence" through cultural communication and communal life. This experience must have been a huge challenge for them.

They went through great culture shocks. After experiencing the wide gap between Japanese customs and mentalities and those of Israel and Palestine, they came to an interesting conclusion. "How similar are Israelis and Palestinians culturally and linguistically! We share so many things that we are like brothers and sisters. Then, there should be a way for us to achieve peace!" I was really delighted to hear these words. This kind of discovery was exactly what I was seeking through the project.

They learned a lot of lessons in the process of producing unity and harmony through undergoing numerous obstacles during tough singing and dancing practices and coping with unfamiliar life styles. They realized that they can become friends, only through accepting and forgiving one another despite occasional frictions and dissatisfactions. I truly appreciate that they felt the preciousness and indispensability of each participant. The Declaration f Peace affirms that the youths will expand the stories of their experiences in Japan. I acknowledge the difficulty of that activity under current situation. Meanwhile, bitterness and distrust are growing between the two nations. However, I believe that the young participants will never give up in delivering the message of peace, that "there will always a solution if we face each other as human beings."

Luckily, many of the former participants of our study tours and summer projects, which count up to 120 Israelis and Palestinians and 90 Japanese, have proceeded to various careers that contribute to world peace. The seeds of peace sown in their heart would eventually sprout out and grow into a giant tree that will bear a lot of fruits. The path to peace will never be shattered. Finishing the summary, I would like to express my deep gratitude to all the organizations and all those who helped us and supported us in many ways in order to implement this project in a successful way.

ろ 準備 Preparations

1. 準備(日本とイスラエル・パレスチナで)

実施月	 準 備	活動の概略		
3月	プロジェクト実施決定	理事会においてプロジェクト実施を決定。共催団体は例年のとおり、ヨハネ・パウロII世財団。長野市で歌やダンスによる国際文化交流およびボランティア活動を中心に。		
4~7月	協賛・後援の 申請	JICA、駐日イスラエル大使館、駐日パレスチナ総代表部、長野県庁		
4月	宿泊施設、交流会会 場の予約	長野での宿泊は信州善光寺玄證院から提供を受ける。 JICA東京国際センター:宿泊、セミナールーム、報告会会場		
5月~8月	支援金募集 助成金申請	本プロジェクトのポスターおよびチラシを作成、支援者や支援団体へ送付。クラウドファンディングを通じて支援金募集。 各種団体に助成金を申請。公益財団法人 三井住友海上文化財団から50万円の助成金を頂く。		
4~6月	参加者募集と 選定	インターネットあるいは口コミなどで、参加学生募集。 現地共催団体JOHAN PAULL II FOUNDATIONと共に、イスラエル・パレスチナから 招聘する若者(9名)を選定、また日本の学生 (4名) も書類審査、面接を経て選定。 (直前になって1名キャンセル)		
5~7月	交通手段の 準備	イスラエル・パレスチナ人のための航空券購入。国内交通手段も確保(JR乗車券、 路線バス切符購入、現地でのレンタカー予約)		
6月~7月	VISA手続き	パレスチナ人の日本入国ビザ取得のための書類作成、エルサレムへ送付。 日本大使館 (テルアビブ) ヘビザ申請、受け取り。		
7月 9~10日	事前研修 (日本)	日本人参加者のため、JICA東京国際センターにて事前研修を実施。 (イスラエル・パレスチナ紛争の理解を促進)		
6月~7月	事前研修 (イスラエル・ パレスチナ)	イスラエル・パレスチナからの参加者のため、エルサレムにて事前研修を実施 (日本についての学習、歌やダンスの練習) 7月に予定した研修は治安悪化のため中止。		
6月26日 7月3日	チャリティー・ イベント	1) 「イスラエル・パレスチナ・日本友好のつどい」 2) 出川展恒氏 (NHK解説委員) による講演会 「混迷する中東情勢を読む		
7月中旬~ 下旬	直前準備	食料品、医療品、雑貨などを購入し、長野の玄證院に送付。 Tシャツ、旅のしおり、名札などを作成。		

1. Preparation (in Japan & in Israel-Palestine)

Month	Heading	Detail	
March	Decision to carry out the project	The executive committee decided to implement "the projec. "JOHN PAUL II FOUNDATION" was to be the co-organizer as usual. Main activities will be a cultural exchange through music and dances and volunteering works in Nagano.	
April - July	Application for sponsorship	Obtained approval from JICA, the Embassy of Israel, the General Mission of Palestine, Zenko-ji Gensho-in, Prefecture of Nagano.	
April	Reservation of accommodation, seminar rooms and location for the exchange event	Accommodation gratis of Gensho-in (Aug. 5 ~ 12) JICA Tokyo International Center (Aug. 12 ~ Aug. 18): accommodation seminar rooms and location for the symposium.	
May - August	Fundraising	Made posters and leaflets to collect funds, started distributing material to supporters and supporting organizations. Applications for subsidies. We are granted a subsidy (¥500,000) by MITSUI SUMITOMO INSURANCE CULTURAL FOUNDATION.	
April - June	Recruitment	Recruitment of participants through internet as well as NPO's connections. Selection of nine members from Israel and Palestine with the co-organizer "JOHN PAUL II FOUNDATION" and selection of four Japanese members through resumes and interviews.	
April - June	Preparation of the activities in Nagano	Contact and coordination with Nagano-City Volunteer Center, some welfare facilities and some local music groups.	
June - July	Reservation of transportation	Purchase of plane tickets for Israelis and Palestinians, reservations of transportation means in Japan: tickets of JR lines and the bus.	
June - July	Application for VISA	Preparation of documentations to obtain Palestinians' entry VISA, sending them to Jerusalem. Local staffs went to the Embassy of Japan in Tel Aviv to apply for and receive visa.	
9 - 10 July	Preparatory Seminar (for Japanese)	At JICA Tokyo International Center, (prepared for the volunteering activities and learned about the conflict between Israel and Palestine.	
June - July	Preparatory Seminar (for Israelis and Palestinians)	In Jerusalem, participants learned about Japan and practiced their songs and dances.	
26 June & 3 July	Charity Events	1)"Friendship Party" (a Soprano concert by Ms. Noriko leda and a buffet) 2) A lecture by Mr. Nobuhisa Degawa (news commentator at NHK)	
Mid-July	Last purchases and arrangements	Purchase of food, medical supplies and other necessary items for the activities, and sent them to Nagano. Made T-shirts, itineraries and nametags.	

2. 日本参加者の事前研修

2016年7月9日(土)、10日(日)、JICA 東京国際 研修センターにて、日本人参加者の事前研修を行なった。イスラエル・パレスチナ紛争の歴史と現状、平和 達成の展望について理解を深めるのが目的。ユースグループ(プロジェクトやスタディー・ツアーに参加経験 のある若者たちによる、法人活動援助のためのグループ)の協力とイニシアティブのもとに行われた。

1日目は、代表の井上から、このプロジェクトが発足したきっかけやプロジェクトの目的、目指すものについての説明があった後、参加者同士の自己紹介をした。午後には、事前課題としてイスラエル・パレスチナ問題について調べたことを各々発表した。

発表内容は、下記の4テーマ

- ・分離の壁 ・入植地
- ・和平交渉の行方 ・エルサレム問題 発表後、知識共有と意見交換。

一日の最後にイスラエル・パレスチナ側の参加者と インターネット電話で会話し、プロジェクトへのモチ ベーションを高めた。

2日目は、プロジェクト参加者だけでなく、「平和」 に興味を持つ一般の方々にも参加していただく勉強会 のかたちで行われた。内容は、1日目の研修で考えて きた「平和」という概念を、学術的観点から考えるこ とである。

『平和を再定義する』(最上敏樹著)と『正戦論』(松元雅和著)の二つの文献資料を読み込み、平和の多様性や日本の現状について学んだ。最終的にイスラエルとパレスチナの現状を平和の具体例として考えた。それぞれのバックグラウンドに基づいて、活発な意見交換が行われた。

この勉強会はプロジェクト参加者の「平和理解」を 深めるためにも役立った。

2. Preparatory Seminar for Japanese Participants

A preparatory seminar was held for Japanese participants on July 9th-10th, 2016, at JICA Tokyo international Center. The purpose is to help them to understand better the history of the Israeli-Palestinian Conflict, its present situation, and the perspective of the way for peace. This seminar was held by the initiative and the cooperation of our "Youth Group". (*)

(*) Last year, some youth who have already participated in our Project or Study Tour have created a volunteer group in order to help the activities of our NPO.

Day 1

In the beginning of the Seminar, Hiroko Inoue, the president of the NPO, talked to the participants about the history of the project, its vision, purpose and goals. And then, they introduced themselves to know each other.

After the lunch, each participant made a presentation on a topic that had been assigned to him or to her prior to the seminar.

Presentation on 4 topics concerning the Israeli-Palestinian Conflict: 1) Separation Wall 2) Settlements 3) Perspective of the Peace Negotiations 4) Problem of "Jerusalem"

Then, they discussed on each topic, shared information and exchanged their ideas. After the dinner, we talked with Israeli and Palestine participants on Skype about the current situation of Jerusalem. The youngsters of the 3 countries were very happy to know each other, even on the Skype, looking forward to really meeting in Japan.

Day 2

A workshop was held not only for participants of this project but also for the public who were interested in peace. They read together two articles about peace on peace published by 2 Japanese scholars, exchanged their ideas and opinions on the different understanding of "peace". They also talked about the current situation in Japan and about the problem of Israeli-Palestinian conflict.

This workshop was very useful for the project participants to understand better what peace is.

3.チャリティー・イベント Charity events

イスラエル・パレスチナ・日本 友好のつどい

6月26日(日)、東京・四谷の幼きイエス会ニコラ・バレ修道院にて『イスラエル・パレスチナ・日本 友好のつどい』を開催した。80名以上の方が参加し、広々とした明るいホールで、和気あいあいとしたイベントになった。イスラエル大使館からは一等書記官ヨナタン・レベル氏が参加、NPO活動へのあたたかい励ましの言葉をいただいた。

冒頭、プロジェクト参加者による映像を交えた活動の紹介を行い、いっそうのご支援をお願いした。

第1部は、藤原歌劇団所属のソプラノ歌手、家田 紀子さんのコンサート、ピアノの瀧田亮子さんとのコ ンビで、素晴らしい歌を聞かせていただいた。また、 家田さんはウィットに富んだトークで聴衆の方々を楽 しませてくださった。

第2部では、恒例となった東京・神田『アルミーナ』



講演会 『混迷する中東情勢を読む』 出川展恒氏 (NHK 解説委員)

7月3日、夏のプロジェクト支援の一環として NHK 解説委員・出川展恒氏による講演会を開催した。会場は昨年に続き東京都武蔵野市のカトリック 吉祥寺教会だった。前日、バングラデシュで日本人7 のアラブ料理ビュッフェが供され、めずらしい味に舌 鼓、そのほか会場にはイスラエル・パレスチナグッズ のバザールコーナーを設け、異国の暮らしに思いを はせていただくことができた。

Israel, Palestine, and Japan Friendship Party

On June 26, we held "Israel, Palestine, and Japan event of friendship" as a mean of project advertisement and fund raising at Nicolas Barré in Yotsuya, Tokyo. With more than 80 guests in a bright and spacious hall, the event turned out to be really cheerful and successful. First Secretary Jonathan Lebel from the Embassy of Israel has kindly delivered a warm speech in the opening of the event..

At first, past participants of the summer project delivered a presentation about the project contents with videos, and encouraged for a greater support.

The following program was a beautiful live concert by Ms. Noriko leda, a soprano singer from Fujiwara

Kagekidan, and accompanist Ms. Ryoko Takita. Ms. leda greatly entertained the audience with a witty talk.

The second part was the buffet of Arab food catered from Al Mina in Kanda, Tokyo. The guests seemed to enjoy the exotic taste of the Middle East. Also, we held a bazar selling souvenirs from Israel and Palestine, which added a foreign sentiment to the event even more.

家田紀子さん(ソプラノ)と瀧田亮子さん(ピアノ)によるチャリティー・コンサート Charity Concert by Ms. Noriko leda (Sprano) and Ms. Ryoko Takita (Piano).

人を含む多数の犠牲者を出すIS絡みのテロがあったばかり。出川氏は4日朝に、トルコで6月28日に起きたテロ事件について解説する予定だったのが、バングラデシュの事件で番組変更になるため、その内容を一部、事前公開するという「おまけ」があった。

講演の内容は、シリアの一部とイラク北西部を制 圧して一方的に国家を宣言したIS(イスラム国)をめ ぐる情勢と、イスラエル・パレスチナ和平の現状である。

ISに対しては、米国が主導し欧州・中東諸国の一部が加わる有志連合にロシアが加わっての空爆と、地上ではシリア、イラク政府軍とシリア反政府軍、クルド人が戦っている。ISはかなりの領土を失い戦闘員の志願者も減ったといわれる。しかし、攻撃側の足並みの乱れなど課題が多く、制圧にはなお時間がかかりそうだとのことだった。

パレスチナ和平については、去年9月以降パレスチナ人の若者によるテロが相次いで、和平交渉の見通しが立たない。1993年の自治合意は、パレスチナ人に国を持たせてイスラエルとの二国家共存を実現することだった。しかし、①パレスチナ国をつくるべき領土にイスラエル人による入植地という障害があって土地を分断 ②和平は無理という意識が双方に強まっている ③和平を進める指導者がいない、というのが現状で、自治合意に基づく和平プロセスは崩壊している。自治合意によるもの以外に交渉の枠組みをつくることが必要だとみている。重要なのは両市民間の信頼と相互理解であり、双方の若者を交流させ、少しずつでも対話の機会を持たせようとする「聖地のこどもを支える会」の活動は貴重なもの、という言葉で講演を結んだ。

出川展恒(でがわ・のぶひさ)

1985 年、NHK入局。91 ~ 92 年テヘラン、94 ~ 98 年エルサレム、2002 ~ 06 年カイロの各支局長を経て 06 年7月から中東・アフリカ・イスラム地域担当の解説委員を務める。



講演を終えて、理事、若者たちと交流。(中央が出川氏) After the lecture. (Mr. Degawa,center)

"Interpreting the Flagging Situation in the Middle East" Lecture by Nobuhisa Degawa, News Commentator at NHK

On July 3rd, we organized a lecture session, as a part of the fundraising for the Summer Project.

Mr. Nobuhisa Degawa, an NHK commentator on Middle Eastern politics generously accepted to deliver a lecture. It was held at Catholic Kichijoji Church, Musashino-city, Tokyo, as last year. The IS-related terror attack in Bangladesh that claimed lives of many, including seven Japanese people, had occurred just the day before the lecture. Since the news program he appears as a commentator had to hastily switch its topic from the terror attack in Turkey on June 28th to that in Bangladesh, we were able to hear a part of his commentary on the terror attack – he was there with the latest information about the Bangladesh incident.

The lecture was mainly about next two topics. Firstly, the situation surrounding the Islamic State which unilaterally declared its independence after taking control over a part of Syria and northwestern part of Iraq. Secondly, he explained about the current status of Israeli-Palestinian peace process.

Currently, US-led coalition of willing nations, including European and some Middle Eastern states and Russia is carrying out air bombardments. Additionally, Syrian and Iraqi armies, Syrian antiregime force, and Kurdish army are fighting on the ground. However, issues within anti-IS forces, such as failing to take concurrent actions, are prolonging the war.

As for the Israeli-Palestinian relation, the terror attacks by Palestinian youths beginning last September appear to be a huge stumbling block for the peace negotiation. Oslo Accords in 1993 aimed to realize the two-state solution by recognizing a Palestinian state. However, there is an increasing apathy towards peace in both parties, since the continued settlement has severed the potential territory for a Palestinian state, and the lack of propulsive leadership which in integral in achieving peace. These issues have resulted in the de facto bankruptcy of the Oslo Agreementbased peace process. He argued the necessity to present a new framework other than that based on 1993 agreements. He concluded the lecture by emphasizing the indispensability of trust and mutual understanding between the two communities, and the projects of "Helping Children" in the Holy Land" are fairly worthwhile for they aim to create the opportunity of dialogue as much as possible.

About the lecturer, Nobuhisa Degawa

He entered NHK in 1985, experienced the directors of Teheran branch (1991-92), Jerusalem branch (94-98), and Cairo branch (2002-06), and currently serves as a commentator on topics related to Middle East, Africa, and Islam.

4 プロジェクトの経過 Daily Reports of the Project

第一部 長野での活動 8月5日(金)~12日(金)

8月5日(金)

午前: イスラエル・パレスチナの参加者がテルアビブから羽田空港に到着、東京駅で日本の学生・スタッフと合流。

午後: 東京から長野へ新幹線で移動。善光寺玄證 院に到着。

8月6日(土)

午前:オリエンテーションとアイスブレイキング。広島原爆記念式典のテレビ中継を視聴して、黙祷。原爆についての短いビデオを見る。そのあと、折り鶴を作成。

午後: びんづる祭りで使用するオリジナルのうちわ (平和を訴えるデザインで)を各自で作成。浴衣を 着て善光寺を見学した後、びんづる祭りに参加。

8月7日(日)

終日:飯綱高原へエクスカーション:長野のボランティアの方々と子どもたちとともに、いわな釣りを体験。その後バーベキューをして大自然を満喫。

夕刻:玄證院で合唱とダンスの練習。その後、イスラエル・パレスチナの参加者はホームステイ先へ。

8月8日(月)

午前:座禅の体験。合唱とダンスの練習。

午後: デイサービスホームを訪問。お年寄りとの交流。 イスラエル・パレスチナの紹介と3カ国伝統の歌を 披露。

8月9日(火)

午前:ボランティアの方々と戸隠高原にハイキング・

交流。すいか割りを体験。

午後:忍者村見学。回転寿司で日本の食文化体験。

8月10日(水)

午前:ボランティアの方々のおかげで、長野三陽福祉センターにて、子どもたちとともに郷土料理「おやき」の作り方を実習。

午後:「イスラエル・パレスチナの若者と一緒に歌おうミニコンサート」かがやき広場三陽デイサービスセンターで、お年寄りの方々および小中学生と交流をした。

8月11日(木)

午前:交流イベント「平和の架け橋交流会」の準備。 合唱とダンスの練習、中東料理の準備。 午後: 「平和の架け橋交流会」:参加者約80名

- 1) 挨拶とプロジェクトの紹介
- 2) 文化交流:3カ国伝統の歌とダンスを披露。 地元のコーラス「カント・キアラ」、ハンドベル・グルー プやゴスペル・グループも参加してくださった。
- 3) 料理提供:プロジェクト参加者がつくった中東 料理を提供し、喜んでいただいた。

8月12日(金)

午前: 善光寺玄證院の掃除・整頓と移動準備。 午後: 高速バスで東京へ移動、夕方東京に到着。 JICA にチェックイン後、自由時間。東京観光へ。



善光寺伝統の「びんずる祭り」に参加。 Participation in the Zenko-ji Festival "Binzuru" wearing Yukata.



言葉は通じなくても、笑顔と握手で国際交流。 Heart-warming Exchange with senior persons with smiling and handshaking.



長野伝統の「お焼き」を子どもたちと共に習う。 Nagano volunteer ladies were teaching to our youngsters as well as to the children how to cook the traditional food "OYAKI".

第二部 東京での活動 8月13日(金)~17日(水)

8月13日(土)

午前:長野での活動の振返りと分かち合い、信頼 ゲーム「平和の架け橋」を築くという本プロジェクト の目的を全員で再確認。

午後:分かち合い「紛争の個人的体験」

ワークショップ「平和のセブンワード」平和と は何かを表す最も重要と思われる七つの言葉を選び 出す作業。

8月14日(日)

午前:報告会のプレゼン資料の準備、歌・踊りの練

午後:東京観光、自由時間

8月15日(月)

午前:ワークショップ「平和宣言」の作成。各自が



プロジェクト報告会でのグループ・ワークショップ (JICAにて) Discussion in small groups at the Symposium at JICA

このプロジェクトの実りとして何を決意するかを考察。その後3つの小グループ、次に全体で、宣言文を作成。

午後: サバイバルゲーム 3 グループに分かれて実施。命の危険にさらされるような事態に遭遇した時、 どのように助け合って生き残れるか。

8月16日 (火)

午前:「絆」ゲーム。プロジェクトの集大成として、 互いの友情、感謝の気持ちをかたちにする。報告会 の準備。

午後:「報告会」

支援者や一般の方などに「平和の架け橋 in 長野」 2016 の成果を報告する。

1) 挨拶と参加者紹介

パワーポイントを使って、長野での活動と共同生活 を紹介

- 2) 質疑応答 出席者の方々と小グループに分かれて交流
- 3) 文化交流 歌とダンスを披露。最後は全員参加の盆踊りで締めくくった。

夕食: フェアウェルパーティー

8月17日(水)

プロジェクト終了、解散。その後、終日自由行動。





イスラエル・パレスチナ・日本の伝統の歌を披露 Performance of traditional songs of each country.

Daily Reports of the project

Part One: Activities in Nagano / Aug. 5 ~ 12

Friday, Aug. 5

AM: Israeli and Palestinian participants arrived at Haneda Airport from Tel Aviv, met Japanese participants and staffs.

PM: Traveled from Tokyo to Nagano by the Shinkansen. Arrived at Zenko-ji, Gensho-in

Saturday, Aug. 6

AM: Orientation and ice-breaking activities. Held a moment of silent prayer in accordance with the live broadcast of Hiroshima Atomic Bomb Memorial Ceremony. Watched a short video on atomic bombing. Folded some paper cranes.

PM: Each participant created an original fan, designed with a representation of hope for peace, for the Binzuru festival at night. After wearing yukata and touring around Zenko-ji, participated in Binzuru festival

Sunday, Aug. 7

All day: Went on an excursion to lizuna Highland. Experiences mountain trout-fishing with local volunteers and children. Enjoyed BBQ in the great nature.

Evening: Rehearsed the songs and dances at Gensho-in. Later, Israeli and Palestinian participants went to their respective host families.

Monday, Aug. 8

AM: Experienced Zazen (Zen meditation). Rehearsed the songs and dances.

PM: Visited day-care nursing homes. Interacted with elderlies. Introduced Israeli and Palestinian culture and performed traditional of the three countries.

Tuesday, Aug. 9

AM: Hiked and interacted with the local volunteers



ゆかたの着付けを手伝って下さったボランティアの方々とヤクーブ。 Yacoub with the volunteer ladies who helped him to wear Yukata.



飯縄高原で、イワナを焼く竹串作りをボランティアの方から習う。 Youngsters working with volunteers at lizuna Highland.

at Togakushi Highland. Experienced watermelon

PM: Visited Ninjya-Village. Experiences Japanese food culture at turning sushi restaurant.

Wednesday, Aug. 10

AM: Learned how to cook Nagano's traditional cuisine, "oyaki," with the children at Nagano Sanyo Welfare Center, thanks to the local volunteers.

PM: "Mini Concert - Let's sing with Israeli and Palestinian youths" at Kagayaki Hiroba Sanyo Day-Service Center. Interacted with elderlies and children in elementary/middle schools.

Thursday, Aug. 11



飯縄高原で、子どもたちとイワナ釣りを楽しむ。 Enjoying fishing with children at lizuna Highland.

AM: Prepared for "Peace Bridge Symposium" in Nagano – Practiced the chorus and dance and prepared Middle Eastern cuisine.

PM: "Peace Bridge Symposium" – Approximately 80 participants attended.

1) Opening remarks and introduction of the project 2) Cultural exchange: Performance of tradition songs and dances from the three countries. A local chorus group "Canto Chiara," a hand-bell choir, and a gospel choir have also participated. 3) A buffet of Middle Eastern cuisine: Offered Middle Eastern cuisine cooked by the project participants. The guests enjoyed a lot.

Friday, Aug. 12

AM: Cleaning Zenko-ji Gensho-in and packing up. **PM**: Travelled to Tokyo by bus, arrived at Tokyo in the evening. After checking in to JICA, participants had a free time to explore Tokyo.



ボランティアの方々との出会い。 Gathering with volunteers at lizuna Highland.



ボランティアの方々が準備して下さったバーベキュー。 お腹いっぱい頂いた! Barbecue prepared by the volunteers of Nagano at lizuna Highland. So delicious!!

Part Two: Activities in Tokyo / August 13 – 17

Saturday, Aug. 13

AM: Reconfirmed the purpose of the project, which is to build a "peace bridge," with all the participants. Reflected on the activities and Nagano and shared their impressions. Played "trust game."

PM: Sharing – "personal experiences of the conflict." Workshop "Seven words for peace" – Participants selected seven keywords that they thought to be the most relevant to peace.

Sunday, Aug. 14

AM: Prepared for the final symposium in JICA. Made materials for the presentations, rehearsed the songs and dances.

PM: Toured around Tokyo, free-time.



小グループに分かれてワークショップ (JICAにて)。 A workshop in small groups at JICA.



ワークショップの進め方について説明するヤクーブ。 Yacoub is explaining to the members how to do the workshop.

Monday, Aug. 15

AM: Workshop – Drawing up the Declaration of Peace. At first, participants individually pondered their resolutions from the project, secondly, discussed those individual resolutions in three small groups, and finally, drafted the declaration as a whole group.

PM: Survival game – The participants were divided into three groups, discussed how they could cooperatively survive under the condition of certain death.

Tuesday, Aug. 16

AM: Played Kizuna game as the grand sum of the project, embodying mutual friendship and appreciations. Prepared for the final symposium.

PM: Final Symposium - Reported the accomplishments of the "Peace Bridge Project in Nagano" to the donors and general supporters.

- 1) Opening remarks and introduction of the participants
- 2) Q & A session in mixed small groups of the project participants and quests.
- 3) Cultural exchange: Performed the songs and dances. Closed the symposium with dancing Bondance with all the participants.

Dinner: Farewell party

Wednesday, Aug. 17

Morning: End of the project and dismissal. Freetime for the rest of the day.



最終日、JICAの玄関でお別れの記念撮影。 Project members in the last day at the entrance of JICA.

5 収支決算 Balance Sheet

プロジェクト会計報告(2016年4月~9月) Project Financial Report (April - September 2015)

収入の部 Revenues

単位:円 Unit: ¥

費目 Items	摘要 Descriptions	金額 Amount	
	一般寄付金 Private donation	1,077,280	3,255,592
	助成金 三井住友海上文化財団 Subsidies by Mitsui Sumitomo Insurance Cultural Foundation	500,000	
支援金等 Contributions, etc.	イベント収入(講演会、チャリティイベント) Charity event participation fees (Total)	421,842	
	参加費 学生、スタッフ、他 Project participation fees (students, staff)	1,032,470	
	その他収益 Others	224,000	
自己資金 Own funds		272,234	272,234
合計 Total			3,527,826

支出の部 Expenditures

費目 items		摘要 Descriptions	金額 Amount	
旅費 Travel expenses	国内旅費 Domestic travel expenses	交通費 (列車、夜行バス、レンタカー他) Transportation (Shinkansen & train fare, rent-a-car and other travel expenses)	350,616	2,327,834
		滞在費 (宿泊費・食費など) Accommodation (Lodging・Meals)	612,714	
	海外旅費 Oversea travel expenses	航空券代 テルアビブ〜成田 Roundtrip travel expenses Tel Aviv	1,364,504	
人件費		事務運営費 Adminisrative expenses	390,400	540.400
Personal ex	rpenses	イスラエル・パレスチナ事前準備費 Preparation in Israel / Palestine		540,400
		施設使用料 Rental fee of seminar room & hall	61,400	96,176
会議費 Conference	exnenses	交流イベント Event fee in Nagano	33,646	
Comercine	CAPCIISCS	諸準備 Miscellaneous expenses for interviews and executive committee	1,130	
印刷・複写	パンフレット・しおり、コピー ・製本費 Leaflets, brochures and booklets	1,470	151 470	
Print / Copy	y /Bookbinding	報告書作成 Making report book	150,000	151,470
通信•運搬	費	通信費 • 宅急便代 Communications / delivery	29,044	20.044
Communic	ations / Delivery	報告書発送 Sending Report books	10,000	39,044
消耗品費		各種生活雑貨 Groceries	7,891	
Consumab	les	Tシャツ T-Shirts	40,000	47,891
雑費		振込手数料 Transfer fees	7,470	22.470
Micellaneo	ellaneous expenses	その他 Others	15,000	22,470
イベント費 Event expenses		講演会、チャリティー・イベント Charity events and seminar expenses	302,541	302,541
合計 Total			3,527,826	

参加者の声 Feedback from the Participants

青年参加者の声 / Voices of the Young Participants



ドール・ベエリ

●イスラエル 20 歳 現役兵士 シンガー ● Israeli 20 years old, soldier of IDF

このプロジェクトでは、新しい文化を発見することと新しい人々に出会うことを期待していた事は、パレスチナ人と話すことにより彼らについてもっとよく知り、紛争に関する自分の知識をさらに深めることだった。

プロジェクトは多くのことを

私に教えてくれた。怖れずに他人に心を開き、自分の気持ちをしっかり表現することができるようになったのだ。

このプロジェクトをとおして、帰国後に自分自身がいかに「平和の架け橋」になれるかということを考えさせられた。私は日本での経験を話し、分かち合うことによって、自分のコミュニティや友だちに影響を与えられると思う。私たちが「平和の架け橋」を築くためにどのように努力したか、また私自身何を新しく学んだかを分かち合いたい。

このプロジェクトで分かったことは、イスラエル人はパレスチナ人との共通点を沢山持っているということだった。例えば初めのうちは、私たちイスラエル人とパレスチナ人には日本人のもの静かさや時間厳守のしきたりに慣れることが大変だった。しかし時間が経つにつれ、私たちももう少し忍耐強くなり、時

Dor BEERI

間を守ることができるようになった。

長野では日本の伝統的な文化についてたくさん学 ぶことがあった。例えば早朝善光寺で仏教のお勤め に参加したのも忘れられない思い出の一つである。

日本での最高の日々の一つはホストファミリーと過ごした時間だった。彼らはとても親切で寛大だった。 私が到着すると家族全員大喜びをしてくれたのである。日本の家族の日常を垣間みることは、とても興味深いものがあった。

今回のプロジェクトに参加したメンバーみんなが 今後もつながりを続けていくことを心から望んでい る。私はこのプロジェクトで多くの友だちができたが、 この友情の絆を強めていきたい。

In the project, I expected to explore new cultures and to meet new people. More than that, I expected to speak with the Palestinians in order to know better the other side, and to deepen my knowledge about the conflict.

In addition, the project was very instructive for myself. It helped me to be more open with other people, and to be not afraid to speak. I learned also how to express myself better.

The project got me thinking about how I can be a peace bridge when I will go back home. I think that sharing my experiences in Japan, I

can influence a lot on my community and on my friends. I would like to share with them about our efforts to build a peace bridge among us and also about the new things I have learned in this project.

In the project I found that we, Israelis and Palestinians, have a lot in common. For example, it was very hard for both of us, in the begining of the project, to get used to the quiet behavior and punctuality of the Japanese. However, after some time. we statred to get used to it and to be more patient and more punctual.

In Nagano, I learned a lot of new things about

the traditional culture of Japan. For example, one of the unforgettable souvenirs is the Buddhist prayer in Zenko-ji very early in the morning.

One of my best days in Japan was with my host family. They were so kind and so generous. They were so excited when I arrived to their home. In addition, it was really interesting to see the daily life of Japanese family.

I really hope that all the group will succeed in keeping in touch. I have got a lot of new friends in this project and I want to strengthen this bond of friendship.

リオール・レヴィ Lior LEVI

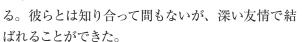
- ●イスラエル 23歳 学生
- Israeli 23 years old, University Student

このプロジェクトについて初めて聞いた時は、異なるバックグラウンドを持った、いろいろな国から来た同年代の若者に会えると知ってわくわくした。このプロジェクトは、彼らのライフスタイルについて学んだり、彼らの意見を聞いたり、彼らをより深く理解する素晴らしい機会だと思った。

日本で過ごした時間は、想像以上に素晴らしいものだった。最初の週は長野で過ごした。長野滞在中、互いに助け合いながら共同生活をしたり、子どもやシニア世代の人々のためにボランティアをしたりして、たくさんの活動に参加することができた。この期間に私たちは友だちとして結ばれ、互いに支え合い、助け合ったのだ。

第2週では、ディスカッションやワークショップのおかげで、それぞれがどのような感情と考えを抱いているのか、参加者が互いに理解することができた。私自身、自分の体験を共有することができたし、友人の話を聞くこともできた。こうして、みんなが苦しみを抱えていることが分かり、誰しも苦しむべきではないと思った。

深い対話やワークショップを終えた今、私が言えることは、相手側(パレスチナ人側)の気持ちをもっと理解することができるようになったということだ。 私は、日本における私の経験を友人や身近な人々に伝えることによって、自分自身が「平和の架け橋」になれることを信じている。 今このプロジェクトを終えようとしているが、私たちはどのように和解することができるか、文化や背景が異なった人々とどのように絆を結べるかを学ぶことができた。私は、新しい仲間たちとやり遂げたこのプロジェクトを今までで一番幸せな時だったと感じてい



Hearing about this project for the first time left me with the excitement that I will meet people of my age from different countries and backgrounds. I believed that this opportunity would allow me to learn more about their lifestyles, to listen to their opinions and to understand them better.

The time I spent here was more than what I expected. The first week we spent in Nagano. During our stay there, we got the chance to get involved in many activities including volunteering with children and seniors as well as experiencing the communal life; to share and help each other. During this process, we were connected as friends; we supported each other and helped each other.

In the second week, our discussions and workshops helped us to understand the thoughts

and feeling of all of the participants. I was able to tell my story, and hear the stories of my friends. I understood that everyone has suffered, and nobody deserved to suffer.

After having those deep conversations and session, I can now say that I understand better what the other side feels. I believe that I will be able to be a peace bridge by telling to my friends and people who are close to me my experiences in

Japan.

I am now finishing the project with the knowledge of how to reach reconciliation and to bond with people that although have different backgrounds than mines. I believe I felt happiest in this program I accomplished with my new friends, friends that I have just made yet to whom I am connected deeply.



リタル・エルカイム Lital ELKAIM

- ●イスラエル 22歳 会社勤務
- Israeli 22 years old, Employee

このプロジェクトに参加する前は私の心の中にはいろいろな不安があった。私たちの訪問先はどんなところだろうか? 食べ物はおいしいだろうか? 私とともに参加するメンバーは良い人たちだろうか? 私と仲良く出来るだろうか? などなど。

結局何も心配することはなかった。みんなとても 親切で、良い友だちになることができた。日本の訪 問先はとても美しく、興味深いところだった。美味し い食物など、いろいろと日本文化のすばらしい体験 をすることができた。

日本文化とメンタリティーはイスラエルとは大分異なる。イスラエルと比べると日本はもっと秩序正しく、 静かで清潔だ。

このプロジェクトでは、自分自身についても、新しく友だちになった仲間についても多くのことを学ぶことができた。他の人と同じように、簡単に相手を裁いてしまう自分を見た。そして誰かについて判断する前に、その人をよく理解し、耳を傾ける必要があることを学んだ。私はここでみんなととても良い友だちになれたし、また思っていたよりももっと私たち(イスラエル人とパレスチナ人)には共通点があることを知って嬉しかった。

私たちはみんな連絡を取り続けるよう努力する。 すでに Facebook でみんな友だちになったし、帰国 してからもまた会う機会を作りたいと思う。私たちは皆、「平和を欲しい!」という同じ理由でここに来た。しかしイスラエルとパレスチナの平和を作るなど、私たちにはあまりにも大きな使命であることを知っている。だから、私は先ず私たちの間にそして私たちの周りに平和を広げることに専念しよう。私は個人的にプロジェクトの体験を周りの人々に伝え、イスラエル人もパレスチナ人も私たちはみんな一緒に平和と相互理解のうちにともに暮らすことができるということを信じてもらいたい。

長野での体験のなかで最高だったのは、ホームステイだった。ホストファミリーでは、新しい文化に触れ、伝統的な料理を習い、日本のライフスタイルを味わうことができた。私が日本でただ一つ困ったことは、地元の人々とあまり話すことができなかったことだ。多くの人は英語をあまり話せなかったし、私も全然日本語を知らなかったからである。

結論として、私たちはプロジェクトの目的である「平和の架け橋」を築くことができたと確信している。 長野や東京での文化交流やさまざまな活動のおかげで、私たちの思いや心を互いに開くことができたからである。

Before I came to this project I had lots of things in mind like: how will be the places that we are going to visit? Will the food be tasty? Will the people who are coming with me are nice or not? Will they think I'm a nice person etc. etc.

In the end I didn't need to be scared out of anything. The people turn out to be kind and became my friends. The places in Japan are beautiful and interesting. The food is very tasty and I had a great experience of Japanese culture over all.

The mentality and culture in Japan are very different from in Israel. Compared to Israel, Japan is more organized, quiet and cleaner.

In this project I have learned a lot on myself, and more important than that, on my new friends I have got here. I saw that as like most people I easily judge the others. I have learned how I need to know the other person and listen to him before I get an opinion on him. I got very nice friends here and I was very happy to find out that we have more things in common than I was thinking.

I am sure that we will all try to keep in touch. We have become all friends on Facebook and we would like do meetings and go out together when we will go back home. We all have come

here for the same reason, "we want peace!" But we know that it is a too big mission just for us to make peace between Israel and Palestine. So now we are going to focus on making peace among us and also among all the people around us. I'm personally going to tell to the people about the project and help them to believe that we all Israelis and Palestinians can live together in peace and in mutual understanding.

One of the best experiences in Nagano was the homestay. With the host family, I could learn a new culture, cook traditional food and experience their life style. The only difficulty that I found here is to talk with the local people because most of them do not know English so well and I do not know Japanese at all.

In conclusion, I am sure that we could make successfully a Peace Bridge, the purpose of this Project, through a cultural exchange and activities in Nagano and Tokyo which helped us to open our mind and heart each other.

モール・ニクソン Mor NIKSON

- ●イスラエル 25 歳 ミュージシャン、イベント企画
 Israeli 25 years old, Musician, Organizer of events
- 私はこのプロジェクトでは、さまざまな意見を持ったメンバーに出会うことを知っていた。この多様性こそ、私たちにとって多くの新しいことを学び、また自分自身についても学ぶこととても良い機会なのだ。プロジェクトのいろいろな活動や共同生活のおかげでみんなが期待していたことを成し遂げることができたのでとても満足している。私たちは今まで知らなかった日本文化に接して新しい考え方や技を発見できたのである。

私はもちろん日本の文化やメンタリティーが、私たちの文化やメンタリティーとはとても異なるということは知っていた。しかし同時に、私たちはみんな同じ必要、思い、感情を持つ同じ「人間」だということも分かった。

こうして私たちは互いに耳を傾け合い、より良い協力をするためにイニシアティブを取ることができるようになった。毎日プロジェクトのメンバーについて理解が深まり、少しずつ何をみんなが望んでいるか、何を望んでいないかが分かるようになった。

私は「平和の大使」となって、「平和は可能だ」ということを 人々に伝える使命があると思 う。しかし先ず私は、自分自 身の内に平和をつくり、他の 人をうわべだけで判断しない ようにしなければならない。

長野は、善光寺という有名 な美しい寺や雄大な自然があ

り、素晴らしい街だ。この街に滞在でき、ボランティアの方々に温かく歓迎していただいてとても幸せだった。私たちは善光寺の伝統的な祭りに参加し、地元の方々と共に楽しんだ。忘れがたいひとときだった。

ある日、私たちは老人ホームを訪問し、3カ国の 伝統的な歌を披露した。お年寄りたちは私たちの訪問を喜び、歌を聴いてくださった。さらに「さくら」 のような日本の歌も一緒に口ずさんでくださった。彼 らの笑顔を見て、私たちは何かためになることをして





長野での国際交流イベントで、イスラエル・パレスチナの若者たちの手作り料理を提供。エキヅチックな味を楽しんでいただいた。 The participants in the International Exchange Event enjoyed the Middle-East Food prepared by the Israeli and Palestinian youngsters themselves.

いると感じ、心を打たれた。

私たちはまた、長野市民と共に大きな文化交流イベントも行った。地元の合唱団やゴスペルグループ、ハンドベルグループなども参加して素晴らしい演奏をしてくださった。私たちの演目はイスラエル・パレスチナ・日本、それぞれの伝統的な歌やダンスであった。長時間の厳しい練習をしたので、聴衆の方々が、私たちのパーフォーマンスに満足してくださったことも嬉しい。

終わりに、私はこのプロジェクトのおかげで、私たちイスラエル人、パレスチナ人と日本人が良い友だちになれたことは素晴らしいことだと思う。これからも私たちは SNS などを通じてコンタクトを取り合い、できる限りまた共に集まって、この友情を保ち、深めていく決意をしている。

I had been expecting to find new members with different opinions in this project. This diversity was a very good opportunity for us to learn many new things and also for me to learn more about myself. I am very happy and feel satisfied that we have achieved together all our expectations thanks to the different activities of the project also to the community life. We could discover new ways of thinking and skills from the Japanese culture that I didn't know before.

I knew that the Japanese culture and mentality were very different from ours. At the same time I discovered that we are all humans with the same needs and the same feelings. (I really enjoyed to know their mentality and to try to understand and appreciate it.)

Thanks to the community life and group activities, we have learned tow to listen to each other and to take initiative in order to cooperate better. Thus I could discover every day many things about the project members and understand them little by little and guess what they like and what they don't like.

I think I have a mission to be an ambassador of peace and to tell to the people that the peace is possible. But first of all, I must learn how to make peace with myself and not to judge people only by their appearance.

Nagano is an amazing city with its spiritual value and beautiful nature. We are so lucky to stay in Nagano and to be welcomed by local volunteers. (We also admired the wonderful greenery of mountains.) Zenko-ji is a famous and beautiful temple. We participated to its traditional festival and enjoyed it with the local people. We will never forget this happy moment.

One day we visited a home for senior persons, and sang for them traditional songs of our 3 countries. We saw them so happy to see us and to listen to us. Even they sang with us some Japanese songs, like "Sakura". Seeing their smile, I was really touched feeling that we are doing something good and worthwhile.

We held also a big cultural event with Nagano citizens. Some local chorus groups, a hand bell group joined us and gave excellent performances. Our program was composed of traditional songs and dances of Israel, Palestine and Japan. We had practiced many times very hard before and during the project. We were very glad to see the audience was also charmed with our performances.

One day, while we were coming back from the mountain to Nagano by car, we saw an old lady falling down at the crossing. I run out of the car at once to help her with Elias, my Palestinian friend while the people in the other cars were only looking at her. Fortunately, some employees from the near Gasoline Station came to help her and called an ambulance. I felt relieved for her but at the same time, I was sorry to see the indifference of the people. But it happens everywhere.

I am very glad that we, Israelis, Palestinians and Japanese became good friends in this project.

For sure, we will be in touch through SNS and meet again as much as possible to keep our friendship.

ドミアナ・ジャセル Domiana JASSER

- パレスチナ イスラエル国籍 22歳 学生
- Palestinian (Israeli Nationality) 22 years old, Student

日本に来る前から、このプロジェクトの目的については理解していた。しかし、具体的な活動内容については、ダンスと歌を披露すること以外、あまり知らなかった。

日本に到着後、私たちはすぐに、プロジェクト前 半の実施地である長野に向かった。そこで想像もし なかった意外な活動が行われたのである。

私たちは、息をのむほど美しい場所へ何度も行った。そして、その大自然の美しさに感動した。また、長野の人々に出会い、温かいもてなしを受けたこと、ホームステイもさせてもらったことは素晴らしかった。長野での多くの感動的な体験は、日本文化についてもっと深く知るために役立った。最も印象に残っている活動は、戸隠山に登ったことだ。自分が世界で一番高いところにいるかのような感覚さえ覚えた。

最初は、新しい環境、すなわち初めての文化や考え方、ライフスタイルに適応することが大変だった。 しかし、できるだけ柔軟になろうと努めたことで、新しい生活にすぐに慣れる事ができた。これほど早く新しい環境に慣れることができたのは、私の人生で初めてである。

最初の週は、プロジェクトの最も難しい部分を始める前の準備として、私たち同士仲良くなるための期間だった。事実第2部のJICAでは、自分の国で起きている紛争のことや、それがどのように自分たちに影響しているのか、各自が自分の思いや体験を話さなければならなかったのである。それはとても辛いことだったが、私たちは互いに心を開いて話すことができた。JICAでのワークショップから多くのことを学んだ。私たちの間に平和をどのように実現させるのか、深く考えさせる機会を与えてくれたのだ。

帰国してから、私はこの経験を周りの人たちと分かち合いたいと思う。そうすれば、彼らも私たちのような平和構築の担い手(ピースメーカー)となれるだろう。

私はこのプロジェクトに参加できたことをとても喜んでいる。さまざまな活動、とくにグループワークショップのおかげで、このプロジェクトの目的を達成できたと思う。私たち参加者は、帰国後に平和の担

い手として歩んでいけるよう に、これからも交流を続けて いく。

このプロジェクトで体験した 一瞬一瞬を私は永遠に忘れな いだろう。



Every moment in this experience will be remembered forever.

Before coming to Japan, I knew the purpose of the project, but I had no idea what are we going to do concretely as activities other than dancing and singing.

When we have arrived in Japan, we went first to Nagano where we have started our project. There were many surprising activities that I would not have imagined beforehand.

We went to so many beautiful and breathtaking places. The nature was amazing. And being welcomed by Nagano citizens and being hosted by them was great. Many good and touching experiences we made in Nagano helped us to know more about the Japanese culture. The best activity that I will never forget was the hiking in Togakushi Mountain. I felt like I'm on the top of the world.

At first it was difficult to adapt ourselves to the change of circumstances: a new culture, new mentality and lifestyle. But we tried to be very flexible and I think this helped us all to get quickly used to this new life. It was my first time in life that I have accustomed to a new environment so fast.

The first week was a period of making us close to each other in order to prepare us for the second stage, the most difficult part of the project. In fact during the second week, we had to discuss and share our view of the conflict and to tell how it is affecting each other and every one of us. It was very hard but we could open our heart each other. The workshops in JICA taught us a lot, and gave us the opportunity to think deeply how to realize peace between us.

I will share this experience with everybody once I will be back home so that they could become peacemakers like us. We are very happy to have participated to this project and to have achieved its purpose. I think all the activities, specially the group workshops, helped us to achieve our purpose. I'm sure that we

will keep in touch with each other through the SNS group that we created for ourselves.

Every moment in this experience will be remembered forever.



カッセム・シャリフ Kassem SHARIF

- ●パレスチナ 25歳 医師
- Palestinian 25 years old M.D. Medecine

日本は母国からとても遠い場所だ。その日本に1回か2回しか会ったことのない「仲間」たちと来日した。にもかかわらず、母国からそこまで遠く離れたという印象は受けなかった。

プロジェクトは日本文化を体験する機会を提供してくれた。 そして日本の文化を学ぶにつ

れて、パレスチナとイスラエルの文化には相違点より も共通点の方が多くあることが分かった。この点に気 づくと、文化が似ているにも関わらず、なぜ私たちパ レスチナとイスラエルは仲良くなれないのかと不思議 に思うようになった。

パレスチナ人とイスラエル人はたしかに隣接して住んでいるが、自由に会話する機会はめったにない。 このプロジェクトに参加することで互いが自由に会話をする環境を手にいれることができた。

私たちは話す機会を持ち、討論を行い、様々な視点を共有した。長野における最初の週では、一人ひとりの個性を理解し、共に働き、ボランティアをした。この体験が友人としての絆を強めたと思う。

東京における第2週目は、ワークショップをたくさん行った。この活動では、紛争に関するシェアリングや個人の体験を共有した。これによって互いの視点をよく聞き理解する事で、すぐに相手を判断してしまわないことの重要性を学んだ。

このプロジェクトは私たちに平和の架け橋を築いた。そして調和のもとに共存できるということを体験したので、平和達成は可能だという希望を持ち続けることができるのだ。

Japan is a very far place from home, a place that I came to with people I met only for few times. Regardless, I did not feel like I was away from home.

The project allowed me to experience the Japanese culture, and the more I learned about the Japanese culture, the more I saw that the Palestinian and Israeli cultures are more similar to each other than they are different. So this kept me wondering, why we cannot get along if we were so similar.

Although, Palestinians and Israelis live closer to each other, yet we rarely get the chance to communicate freely. Joining this project provided us with the environment to do so.

We got the chance to talk, to discuss, and to exchange points of view. The first week in Nagano allowed us to learn more about each person's personality, to work together, to volunteer and to help each other. This allowed us to bond one another as friends. The second week in Tokyo was filled with workshops to reflect on the conflict and personal experiences, this showed us the importance of listening and understanding each person's point of view and not be quick to judge.

This project allowed us to build a peace bridge between us, and being able to see that we can live together in harmony allows us to stay hopeful that peace can be achieved.

エリアス・ハズブーン Elias HAZBOUN

- ●パレスチナ 20歳 学生
- Palestinian 20 years old, Student

プロジェクトは私にとってある意味挑戦だった。な ぜなら私たちとは全く異なる日本人のメンタリティー や文化に適応しなければならなかったからである。 しかし、その挑戦は楽しく、そして新鮮だった。日 本人と私たちとは考え方も行動の仕方も食べるもの も全く違う。日本人にはすべてにおいて独自のやり 方がある。私にはどんなに難しくても、日本の風習 を学べるので嬉しかった。

私にとってコミュニケーションはそんなに難しくなかった。私は人付き合いが良く、新しい友だちを作るのが好きだ。でも周りを困惑させたり、皮肉を言ったりしてしまうこともある。ときに受け入れられないこともあるが、それも私だ。プロジェクトは友だちを作ったり、良い関係を深めたりできる素晴らしいものだった。私たちの築いた友情は生涯に渡って続いていくだろう。

私たちが友だちとなれたのは、プロジェクト中みんなで行った活動のおかげだった。これらの活動はとても面白くて、日本や長野について、多くのことを学ぶことができた。

私たちには楽しい時間も辛い時間もあった。楽しい時間は数え切れないが、辛い時間も忘れられない。 例えば早起きが苦手な私にとって、毎朝起こされる のが苦痛だった。

驚いたのは、日本には、多くの観光地や緑の多い 美しい景色、建築物や高層ビルなどがあって、実に 素晴らしい国だということだ。そして最も重要だと感 じた事は、日本人が秩序や法律をとても大切にして いるということである。彼らは自分たちの国をきれい に保とうとしている。私はそれをとても羨ましく感じ ており、私も日本に住みたいと思うほどだ。

日本での経験を一言で表すならば、信じられないほど素晴らしかった、ということである。

The project was challenging for me, we had to adapt with Japanese mentality and culture which are totally different from ours. But it was fun challenging and new. Japanese don't think like us

or act like us or eat like us. They have their own way of everything. Talking of myself I liked it because it contained a challenge and taught us Japanese manners.

Communication was not so difficult for me. I am a social person. I like making new friends, I love messing around

and being sarcastic. It is not always acceptable but that's me. The project basically allowed us to make new friends and more relations, which is nice. The friendship we made will continue for the rest of our life.

One of the things that helped us to become friends was the activities that we have done together. They were so interesting, and we have learned so many new things about Japan and Nagano, and also the difference in the way of life in Nagano and Tokyo.

We had good times and bad times. Good times are endless but the bad times are unforgettable I don't like waking up early, because I am not used to it.

Now, for the good ones, Japan was totally amazing with so many sightseeing sites, green and beautiful landscapes, buildings, skyscrapers etc. And most important thing is that Japanese people really follow the orders and laws, and they like to keep their country clean. I felt so jealous that I want to live in such a place. I would really live in Japan.

I am going to make it short, my experience in Japan was: UNBELIEVEABLY MAGNIFICENT.







ラナ・ランティシ Lana RANTISI

- ●パレスチナ 23歳 社会人
- Palestinian 23 years old, Employee

このプロジェクトで素晴らしかったことは、それぞれ個性が異なる参加者の全員がひとつにまとまったことだ。参加者はそれぞれ異なった才能を持っていた。リーダーシップを発揮したり、冗談を言うのが上手だったり、すてきな声を持っていたり、私たちはみん

な、それぞれが美しい花だったのではないだろうか。

最初は、互いに協力したり、常に規則に従ったり、 初めての食べ物の味に慣れたりするのは容易ではなかった。自由時間にさえも問題はあった。しかしこの難しさのおかげで新しい文化や伝統に慣れ、いろいろなことを学ぶことができた。さらには必要な時には、互いに助け合うことも学んだ。寛容と調和と赦しの価値を学び、また「自分にしてもらいたいと思うことを相手にする」という教えを実行する良い機会でもあった。こうして私たちは毎日すこしずつ関係はより深くなり、これからもずっと続く「きずな」が築かれたのである。

私自身のことを言えば、日本での体験のおかげで、 私の視野がもっと広くなり、心を大きくして「敵」を 受け入れることができるようになった。今では、議 論の時でも合意に達するように、私は喜んで相手の 話や見方に耳を傾けることができるようになったし、 さらには文化の多様性にももっと容易に適応するこ とができるようになった。

音楽やダンスによるコミュニケーションという手法は、私たちを一つにする独創的な手段だった! プロジェクト中、それぞれの国の伝統的なダンスや音楽の練習をしなければならなかったが、それはみんな一緒に楽しみ、笑い、「友」の顔を笑顔にし、私たちの間にきずなを結んだ。さらに私たちはアート以外にも、「平和のことば」を創りだした。私たちは、アラビア語で「マルハバ」、ヘブライ語で「シャローム」、日本語で「コンニチハ」など、簡単な挨拶を習い、喜んでお互いに"平和のことば"、そして"平和のためのことば"を使いあったのである。最高の時間だっ

た。

プロジェクトに参加するのは初めてだったが、私は長野と東京で行われた2016「平和の架け橋」の種となって聖地に帰ろう。私はこのプロジェクトで、心を開いて対話と交渉をすれば平和な共同体を作れるという確かな展望を持つことができ、また相手を愛するために、裁くことなく耳を傾け、受け入れるということを学んだからだ。

終わりに言いたいのは、平和と自由への道は私たち現代の若者の目の前にあるということだ。私たちに必要なのは、ただ、目的に向かおうとする持続的な熱意と意思である。「平和の架け橋プロジェクト」は、現代に生きる若者である私にとって、この平和への旅を始めるための枠組みであり、柱となった。私は、これからも多くの実りを結ぶことができるように、このプロジェクトを次世代に受け渡していきたいと思う。

It was amazing how our differences made our unity in this Project. Each member had got special talent e.g. leadership skills, ability to make jokes, nicer voices, all together we were just like flowers.

At the beginning it wasn't that much easy to cooperate between us, follow rules all the time, adapt to different tastes in food at lunch so on, even at our free time activities. But this turned out to be a cool topic for us to adapt to new culture and its positive habits, to learn from it, and taught us how to help each other whenever it is needed making sacrifices for one another. It was the time to insist on values of tolerance, harmony, forgiveness and to want to do for the others what you want them to do for you. Day after another we built stronger relationships, thus the spirit of KIZUNA "the bond" is built between us from now on.

On a personal level, Japan experience widens my horizon and open up my heart widely to accept my 'enemy'. Now I am more happily listening to the other sides' case and point of view even at time of arguments I just try to reach an agreement. Moreover, it is much easier for me now to adapt to new cultural diversity.

The language of art through music and dancing was an unconventional way to bond us! During the project, the necessity of practicing the traditional dances of each nationality and rehearsals of songs, as well, was the best time to have fun, to draw smile on my FRIEND'S face, to laugh together and bond us overall.

Moreover, we have created a language of peace between us, not only through art. While we were all trying to learn pieces of the others' languages, e.g. Hello: 'Marhaba' in Arabic, 'Shalom' in Hebrew, and 'Konnichiwa' in Japanese, happily doing it, we were all speaking the language of & for peace.

For me, being part of this project for the first time, I will be the seed of August, 2016 Nagano-Tokyo, and I will return to the Holy Land with a clear vision on how to be open up to a peaceful community through dialogue and negotiation and with an ability to hear, to accept the others without judging them in order to love them.

I'll end up my word, I am a youth who beliefs that the process of peace and freedom is in front of our eyes as todays' youth; we need only a continuous self-motivation and will. Peace Bridge project was the flame and the pillar to start this journey, for me, as a youth of today; I will hold it forever for a more fruitful future generations.

ヤラ・ズレイク Yara ZREIK

- パレスチナ イスラエル国籍 25歳 音楽教師
- Palestinian (Israeli Nationality) 25 years old, Music Teacher

私の日本での体験は、これまでの生涯で最も素晴らしいものだった。実は、このプロジェクトについて詳細を前もって聞いていなかったので、実際は私の期待していたこととは少し違っていた。しかしそれは私の期待を遙かに超えるものだった。

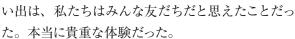
プロジェクトに参加する前、私は訪日準備のために、日本に関する本を何冊か読んだ。日本人に対して尊敬をもって接し、彼らの伝統の素晴らしさを理解するためである。しかし準備してきたにもかかわらず、私はしばしば驚かされた。日本文化は、本当に私たちの文化と異なる特別な文化だったからだ。他の参加者にとっても同じだった。私たちにとって毎日わくわくするような楽しい「冒険」だった。

プロジェクトのおかげで、私たちは、どれほど文化やことばや宗教が違っても、みんな同じ人間であることが分かった。だから私たちは互いに忍耐もできたし、人から裁かれる心配もなく理解するように努めながら、共同生活ができたし、良いチームワークで協力することができた。こうして、良い友だちになるために、たがいに助け合ったと思う。

このようなプロジェクトはもっと多くの人々に知られるべきだと思う。だから私は帰国したら、友だちや家族に日本での体験を話し、私たちと"異なる"人々とでも友だちになれるということを証ししようと思う。

それに、3カ国の若者たちとともに生活し話し合った体験をもとに、「平和は可能である」という確信をみんなに伝えたい。

私たちは長野と東京で素晴 らしい活動を行った。中でも 最も感動した忘れられない思



私には辛かった思い出はさほどない。ただ紛争の体験について分かち合いをするように言われた時は、話を始める前から胃が痛くなり始めた。友だちになった人たちと争いたくなかったからである。幸いなことに互いに尊敬の心を持って聴き合い、心を開いて率直に話すことができた。

グループの一員として共同生活に参加できたことはとても幸せだった。とても楽しかったし、たとえ性格が違ってもお互いに最良のものを出し合うことができた。もちろん、時には、意見が一致しなかったことがあっても、一人になると寂しくなってしまうほど親しくなったのである。だから、このプロジェクトは成功したと言えるのではないだろうか。

私はインターネットなどをとおして、全参加者とコン



タクトをとり続けるつもりである。パレスチナからの 参加者とはすでに再会の約束をしている。日本人に ついては、全員を私の家にお迎えできたらどんなに 素晴らしいだろう!

もし私の経験を二文字で要約すれば、それは「最高!」

My experience in Japan was one of the best experiences in my life. My expectations were a little different, because I didn't have enough information about the project itself. But Japan exceeded all my expectations.

Before the Project, I have read some books about Japan in order to prepare myself for this visit. I wanted to be respectful to the Japanese people and to appreciate their traditions. But in spite of my preparation, I was often surprised because Japanese culture is so special and so different from ours. It was the same for the other participants. It was really an adventure for us every day! We enjoyed it very much!

This project made me realize that we are all human beings in spite of the diversity of culture, language or religion. Therefore, we could live together and collaborate together in good teamwork, trying to be patient and to understand each other without any fear of being judged. I think we could help each other to become good friends.

I think that a project like this needs to be known among more people. Therefore I will talk to my friends and to my family, once back home, about my wonderful experiences in Japan and give them testimony that we can become friends with people who are "different" than us. Moreover, I will talk to them my conviction that the peace is possible according to my experiences to live and to talk with the youngsters of the 3 countries.

We had amazing activities in Nagano and Tokyo. The most touching souvenir is the moment when we felt that we are all friends. It was a so precious experience. I don't remember something bad that much. But when we were asked to share about the personal experience of the conflict, my stomach started to hurt even before we started to talk, because I didn't want to fight with my friends. Luckily it was all very respectful and peaceful.

I got the privilege to try community life and to be a part of a group and we had so much fun we were all with different personalities but we got the best out of everyone. Sometimes it was hard because everyone wants something different. But when we were alone, we missed each other. So, I think we're a winning team.

I will definitely be in touch with everyone, via internet. We have already planned to meet the members from my country. As for the Japanese friends, I would love to host them all!

If I summarize my experience in two words, it is: BEST EVER!



大野田 さよ Sayo OONODA

- 日本 22歳 大学生
- Japanese 22 years old, University Student

プロジェクトに参加する前は、パレスチナ・イスラエルからの参加者との文化の違いを感じるのではないか、コミュニケーションはうまくいくのだろうかと不安なところもあった。だが、プロジェクトが始まってみると、3カ国の若者の違いは実際あまりないと感じた。2

週間生活を共にし、同じ経験をする中で、考えること・

感じることはとても似ていて、どこに住んでいるか関係なく、友だちになることは容易だった。短い時間で文化交流イベントに向けて歌やダンスを練習するという同じ目的があったことで、私たちの"絆"はより強まったように思う。

プロジェクトの後半戦、東京に移動後、個人の体験をもとに一人ひとりがどのように紛争を捉えているか意見を共有した際も、パレスチナ人・イスラエル人・日本人共に平和を願う気持ちに違いはないと感じた。紛争当事者である彼らはそれぞれ辛い経験を分かち

合った。そのあと、とくに意見が対立することもなく、 みんなで一つの「平和宣言」を作ることができたの にも驚いている。

今回のようにパレスチナ人・イスラエル人全員の意見が一致することはなかなか難しいことだ。まずは両サイドに平和を願う人がいるということを知ることが大事だと思う。3年前に現地に行ったとき、パレスチナ人・イスラエル人は隣同士に住んでいても、交流がなく、互いの考えていることを知る機会は非常に少ないと感じた。だから、日本という遠く離れた場所で、生活を共にし、話をし、友だちになることができたことは、非常に貴重な経験だったと思う。

文化交流は今回のプロジェクトの目的の一つだったが、パレスチナ人・イスラエル人たちに日本のことを紹介するだけではなく、日本人にもパレスチナ・イスラエルについて知ってもらうことができたことも嬉しく思う。

パレスチナ・イスラエルがどこにあるのかも知らない日本人は少なくない。

戦後71年、今の日本人、とくに私たち若者世代は平和が当たり前であるかのように感じている人が多い。紛争当事者である彼らとまず出会い、当事者意識を持って考えること。これが平和への第一歩になると感じた。私はこれからもこの地域の問題についてかかわっていきたい。と同時に、一人でも多くの人に平和について深く考えてもらえるように、行動していきたいと思う。



デイサービスセンターながでんハートネット桜枝町のお年寄りと交流。 Communications and contacts with senior persons in a day-service home.

Before I took part in this project, I had thought that I would find the cultural difference between the participants from Israel and Palestine, and I was worrying if I could communicate well with them. However, once the project began, I found that they were not so much different from Japanese young people. By living in the same place with them for two weeks, I realized that their way of thinking and feeling was almost the same as ours. Regardless of where we live, it was fairly easy for me to become friends with them. We practiced dancing and singing together and shared the same goal to make our performance better for the cultural event, and I'm sure that this event strengthened our bond.

After having moved to Tokyo, we discussed and talked how we see the conflict between Israel and Palestine based on our own personal experiences. I also realized that all of us had the same desire wish for peace.

The participants from Israel and Palestine shared each other frankly their own painful experiences of the conflict. After that we could surprisingly make our "peace declaration" without any objections.

I think it is rather rare to have people from both Israel and Palestine who could agree upon the same peace declaration in the real life. But it is important for us to know that there are people who wish for the peace in both sides. When I visited Israel and Palestine three years ago, I Israeli and Palestinian people had almost no chance to understand and communicate with each other though they live nearby. Therefore, I believe this project held in Japan was a great experience for them because they could live together, talk to each other, and become friends.

A cultural exchange was one of the purposes of this project. I am pleased because we could introduce Japanese culture to the people from Israel and Palestine and also Japanese people had a chance to understand about Israel and Palestine. Many Japanese people don't even know where Israel and Palestine are located.

Seventy-one years have passed since the end of World War II, and many Japanese people, especially younger generation, take the peace for granted. I believe the first step to the peace is to meet people who are suffering from the conflict and think about it as our own problem. I would like to study more about the issues raised in this region and at the same time I want to work so that many people could think about the peace deeply.



梶原 裕史 Yuji KAJIWARA

- 日本 21歳 大学生
- Japanese 21 years old, University student

実はこのプロジェクトに参加 するにあたり、期待よりも不安 のほうが大きかった。

覚悟を決めて、イスラエル・パレスチナから来る参加者と 日本人参加者やスタッフなどを 全力でサポートすることにした。

どんなに自分とは異なる人々 でも温かく迎えようと決意して

いたが、これはとても大変なことであった。異なる文 化やメンタリティーを持つ人々と接すること、ともに生 活していくことの難しさを日々実感した。

イスラエル・パレスチナの若者たちは、ストレートにものを言う習慣を持っているので、驚いた。しかしただ言い返す訳ではなく、お互いに分かり合えるよう 粘り強く対応した。

主に長野では、外国人である彼らと共に生活する ことで、日本人であるにもかかわらず忘れかけていた 日本の伝統文化や精神を新しい目で見ることができ た。

老人ホームを訪問した時は、私を含め、みんなが 居心地良く感じられたと思う。それはおそらく優しさ が必要とされている場所だったからではないだろうか。

共同生活も後半になると、時に思い通りにいかず 感情的になることもあったが、それは何とか克服する ように努めた。皆が過ごしやすいようにサポートする ために、真心をもって尽くすことを心に決めた。

そのうちに自分がこのグループの中にいる意味を 段々と理解し始めたのである。

実を言えば、このプロジェクトは私にとって非常に 苦しい体験であった。しかしこの試練を堪え忍び、 自分の弱さに打ち克って逃げ出さなかったからこそ見 えてきたものがある。それは、国や、人種やことば や性格やメンタリティーがどれほど違っても、互いに 尊敬し、認め合い、受け入れ合うことができること、 それこそが平和への礎だということである。

最後に村上春樹の言葉を添えて 一希望あるところ、試練あり一 Honestly speaking, I had more anxiety than positive expectation for the project. However, I made up my mind to do my best to support the participants from Israel, Palestine and Japan and the staffs.

I was determined to warmly welcome any people that are different from me, but this turned out to be a struggle for me. I continuously felt the difficulty of engaging with and living with people of different mentalities from distinct cultural background.

While straightforwardness of Israeli and Palestinian youths sometimes surprised me, I attempted not to simply talk back but to patiently understand one another.

In Nagano, I enjoyed, perhaps thanks to the cohabitation with my foreign friends, rediscovering with new eyes Japanese traditional culture and spirit which I had almost forgotten. I think all of us were able to feel comfortable when we visited the nursing home. Maybe that was because the place required kindness.

There were some times in the latter half of the communal life when I got some difficulties emotionally, but I tried to overcome those negative sentiments. I was decided to truthfully support everyone so that they could spend their time comfortably.

Eventually, I began to realize my role in the group. This project was a hardship for me in a way. However, there were things that became visible exactly because I endured this trial and did not run away from my weakness. I found out that mutual understanding and respect is possible, even among people of diverse national, racial, cultural, and spiritual backgrounds. Moreover, this is the foundation of peace.

I would like to end with a quote from Haruki Murakami: "Where there is a hope, there is a trial"

渡邉 まり Mari WATANABE

- 日本 21 歳 大学生
- Japanese 21 years old, University Student

「平和は家庭から始まります。どれほど多くのことをするかではなく、どれほどの愛をその行いに込めるかが大切です。愛は最も近い人、家族を大切にすることから始まります。」

これはマザー・テレサの言葉で、私が大切にしていることの一つである。そして今年のプロジェクトを非常に的確に表現している。私たちは、プロジェクトを通して一つの家族になった。多くの時間を共有することで、互いを理解する努力、そして愛を学んだ2週間だった。はじめはみんなが異なる言語で話していたが、ボランティア活動、共同生活を通して、国や言語に関係なく会話し行動するようになり、互いへの理解が自然に生まれた。私が辛かった時にも、みんなが心配してくれて「大丈夫だよ」とハグしてくれたり、互いの経験やコンプレックスなど心からの話ができたり、冗談を言って笑いあったりと、みんなと過ごす2週間の日々は本当にあたたかく、かけがえのないものだった。私たちは今でも連絡を取り合っているし、生涯続く友情になると思う。

人と人とのつながりは、国同士の争いなど関係なく、あたたかく素敵なものだ。大きな平和はまず小さな平和、小さい芽がなければ始まらない。そして平和の芽が生え出るには、まず友達になって相手を知ること、それに尽きると思う。そうすれば相手側への想像力が働き、エゴによらない、思いやりを持った判断ができるようになり、平和を広げていくことができるだろう。環境問題も、格差問題も、紛争・戦争も根本的な原因は人間の持つエゴにあると思う。

まずは「友達になる」というこのプロジェクトで、 私たちは一つの家族となり、相手のことを自分のこ とのようにとても近く感じられるようになった。私た ち一人一人の心に芽生えたこの芽が、ノートルダムの 前に植えられたオリーブの木 * のようにすくすくと育 ち、枝となり実となり葉となり、いつか大きな木となっ て、世界中に広がっていくことを真に願っている。私 たちみんなが、信じた道をまっすぐに、「平和の架け 橋」となるために歩んでいくことができるように願っ ている。

もう一度マザー・テレサの引用をもってこのレポー

トを終わる。「私たちには大きなことはできません。ただ、小 さなことを大きな愛で行うだけです。ここから平和が始まる のです。」

このプロジェクトのために尽力してくださった理事長をはじめスタッフ、ボランティアや支援者の皆様に、そして私を支えてくれた家族にも感謝している。



*2009 年にイスラエル・パレスチナで行ったプロジェクトの記念として、参加者の出資でエルサレム・ノートルダムセンターの庭にオリーブの苗木を植えた。7年がたち、高さ5mに成長している。

"Love begins at home, and it is not how much we do, but how much love we put in that action. Love begins by taking care of the closest ones - the ones at home."

These are the words of Mother Teresa whom I cherish. They express our project well. We became a family through the Peace Bridge Project.

We made efforts of understanding each other, learning love, and sharing lots of things.

Initially, we spoke to each other in our own languages but through volunteering and living together, we gradually became having conversations and spending our time together regardless of nationalities or languages. It naturally raised acknowledgement among each other. Through the activities our joy was doubled but sorrow was halved.

When I was down, the other participants cared about me and gave lots of warm hugs to me. We talked honestly from the bottom of our heart, even about our personal experiences, complexes and so on. We also have fun with talking jokes and laughing. It was heart-warming and unforgettable days spending with everyone.

Having many intimate friends in the world is wonderful thing! The relationships between individuals are warm thing that could overcome the conflicts of nations.

As a big tree grown up from a little bud, global peace begins with making peace around

one's self. And a small bud for peace is never grown without knowing each other by becoming friends. Only after then we can imagine what and how opposite sides are like. It makes us to put our ego aside, especially when we are making decisions. This might be a way of spreading the peace because human ego is the central factor almost of all problems like conflicts, wars, environmental problems, huge gaps between the rich and the poor.

This project begins with making friends and thinking intimately about the others who are given to us to be a family.

I hope with all my heart that the bud which grown in ourselves, steadily sprout even little by little, become a big strong tree which reach its branches out into the world and bear fruits like the olive tree* planted in front of Notre Dame Center. We all will work for being a peace bridge.

We want to continue to walk steadily on the way we believe to build a peace bridge. I want to end this report by quoting Mother Teresa once again. "We can do no great things, only small things with great love and that's the exact thing to make the world peace."

I truly appreciate for the support of CEO, staff members, many volunteers and people who gave these chances to us and made efforts for the project to success! I, especially, want to say thank you to my family for supporting me always.

* A tiny olive tree has been planted in Notre Dame of Jerusalem Center in memory of the Peace Project held in 2009 in Israel and Palestine. It is growing up almost 5 meters high.

スタッフの声 / Voices of the Staff



ヤクーブ・ガザウィ Ya'coub GHAZZAWI

- 27 歳 イスラエル・パレスチナグループの責任者・現地スタッフ
- Staff and Responsible of Israeli and Palestinian Group

国際交流プロジェクトは10年以上も前から続けているが、今年のプロジェクトはその中でもとてもユニークで特別なものとなった。今年のプロジェクトは、10年以上も前から続けているこの事業の中でとてもユニークで特別なものだった。私は、プロジェクト前は、

イスラエル・パレスチナ参加者の責任者として任務を 重責と感じていた。しかし幸いなことに、参加者た ちは私の責任の重さを理解してくれて、あらゆる点で とても協力的で私を助けようとしてくれたので、本当 に感動している。

しかし、同時に自問自答したことがある。なぜこの若者たちは、帰国したとたん、協力し合うことができなくなるのだろうかと。聖地にいては難しいことでも、日本にいれば彼らは協力して実現することができるのだ。この質問への答えは、私は「日本」だ

おらだと思う。ここでは、イスラエルとパレスチナの若者たちは、日常の紛争から遠く離れて、平和な雰囲気のうちに共同生活ができた。日本の文化は、彼らの文化とはあまりにも違うので、自分たち同士どれほど似ているかを自覚できるようになった。こうして彼らはお互いにもっと親しくなって理解し合えるようになり、苦しみも幸せも心を開いて分かち合う素晴らしい機会を得たのである。プロジェクトが終了した時、イスラエルとパレスチナの若者が本当に良い友だちになったのを見て、私はとても幸せに思った。そして「やり遂げた!」と思った。

私たちはいつも愛と平和を望む人々の善意を信じなければならない。もちろん信じ続けることは容易いことではないが、不可能ではない。私はこのプロジェクトが継続されることを、また聖地の若者たちや日本の若者たちの心に蒔かれたこの平和と相互受容の種が成長して行くことを心から望んでいる。

This year's project was unique and special among all the projects we have accomplished since more than ten years.

Before the project, I was feeling as a burden to me my duties as the responsible of the Israeli-Palestinian delegation. But fortunately the participants who have realized how difficult and sensitive responsibility I had, collaborated with me very much. I was very touched to see them to help me in every possible means.

But at the same time, I was asking me why the youngsters would not be able to collaborate and work together once back home. In Japan, they have cooperated to accomplish together many things together. In the Holy Land, it would have been very difficult to do so. I think the answer for this question is JAPAN. Here, these youngsters from Israel and Palestine could live together in an atmosphere of peace, far away from the everyday

conflict. Japanese culture is so different from theirs, and they found themselves how much they are alike. It was a very good opportunity for them to open themselves each other to share their sufferings as well as their happy moments together.

At the end of the project, I was so happy to see these Israeli and Palestinian youngsters who have become so good friends, and I said to myself: "we did it".

We should always believe in the good will of love and peace. It is not easy to continue to believe, but never impossible. We should have patience, tolerance, acceptance, and bonds with each other. I really hope that this project is going on and that these seeds of peace and acceptance are growing in the heart of the youngsters of the Holy Land as well as of the Japanese.

福島貴和 Takakazu FUKUSHIMA

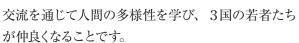
- ●信州善光寺玄證院住職、認定 NPO 法人 聖地のこどもを支える会理事
- Buddhist chief priest of Shinshu Zenkō-ji, Genshō-in
- Director of NPO Helping Children in the Holy Land

平和の架け橋プロジェクト(以後、本プロジェクト)は長野において5日から始まりましたが、奇しくも、リオでのオリンピックも8月5日から始まりました。どちらも「平和」がキーワードです。古代ギリシャにおいて、たとえ戦争状態にあっても、一旦武器を置いてオリンピアに集まったのが、古代オリンピアードの始まりと聞いています。近代オリンピックも、クーベルタン男爵が提唱したこの平和の理念から出発しています。

ところが、リオのオリンピックの柔道で不祥事が起こりました。対戦したイスラエル選手との握手をエジプトの選手が拒否したのです。結局この選手は帰国処分になったとのことです。平和の祭典オリンピックにおけるこの様な事態は、イスラエルとアラブの諸国との並々ならぬ確執を象徴しています。

本プロジェクトはまさにこの紛争(戦争) 当事国の 若者を日本に招いて、平和といのちの尊さを考えても らうためのものです。

私がこの国々の人間だったら、おそらく、理念は 理解できても参加はためらったでしょう。参加してく れた若者たちの勇気に感謝します。とはいえ彼らでも、長野における合同合宿の最初は大いに戸惑ったことでしょう。長野におけるプロジェクトの目的は、平和な日本で、今までに経験したことのない緑の大自然の中で、多くの方々との文化



今回は、長野のボランティアの方々から大いに協力をいただきました。最初、お声をかけたときには、イスラエル、パレスチナーー? あまり聞いたことないけど、何か問題のある地域から来た人らしいという冷めた雰囲気が感じられました。参加した若者たちは気づかなかったかもしれませんが、ボランティアの方々は、「ああ、この若者たちは真に平和を求めているんだ」と最後には気づいてくれました。「我々は今、平和の国日本にいるけれど、目を外国に向けたら戦争で苦しんでいる国々があるんだ。やはり世界が平和



にならなくては。」と思ってくれました。このプロジェクトを長野でと企画した時には考えられなかった良い効果が得られました。長野でやって良かった!

今回の長野の特徴はなんと言っても、善光寺のお 膝元だということでしょう。仏教、あるいは仏教的雰 囲気が、否応なしに参加者たちの心に響いたのでは ないでしょうか。私は仏教の僧侶です。お釈迦様の 教えに『実にこの世においては、恨みに報いるに恨み を以てしたならば、ついに恨みの息(や) むことがない。 恨みを捨ててこそ息む。これは永遠の真理である。』 とあります。これは、仏教徒にしか分からない真理 だろうと思っていましたが、宇宙に遍満する、どの国、 どの人間にも通じる真理でした。昨年11月にパリで 起こった無差別テロで妻を亡くしたアントワーヌ・レリ ス氏は、犯人を「憎まない」と言いました。「犯罪が おぞましいほど、憎しみは正当なものになる。」でも、 犯人を非難しなければ、「悲しみとだけ、まっすぐに 向き合う」ことができる……。こう言った真理が少し ずつ両国の人々にも届きますように。

プロジェクトの後半は場所を東京に移して、主に「平 和」を考えました。後半部分の成否はやはり、前半 の長野での成果いかんによります。いかに両者が真 の友達になれたか。私は今回で5回目の参加ですが、 参加両国の紛争状況により、やはり年ごとに違いが 感じられました。今年は満点に近かったと思います。 現地では政治情勢が比較的安定しているそうです。 ただ、紛争はもう何十年も続いているのですから、 現在の情勢がそんなに響くものかとも考えます。いろ いろ考えましたが、今年の参加者は歌を歌う人が多 かったという特徴があったようです。私も歌が大好き で、キリスト教の歌を歌っています。これは、ヤクー ブが苦労して人選をしてくれた結果でしょう。先にオ リンピックを話題にしましたが、やはり、スポーツ、 歌などが「平和」によく似合うことだと思いました。 1998年の長野冬季オリンピックが、長野における ボランティア活動を盛んにしたことも、平和に貢献し ています。

東京に戻って平和トークをした後、ある若者は、イスラエルでは平和という言葉さえ口に出せなかったのに、今では平気で言えるようになったと言いました。 参加者たちは、お国に戻ったら自分なりに平和を追求したいと、口々に話していました。紛争の地、イス ラエルあるいはパレスチナに降り立ったとき、その決心に揺らぎのないことを長野から望んでいます。もし、困難に出会った時には、長野でのさまざまな経験を思い出してもらいたいものです。

最後になりますが、長野でのプロジェクトの成功の 立役者はなんといっても、長野ボランティアセンター のコーディネーター小林ひと美さんです。ご自身の人 脈を生かし、多くのボランティア団体に声をかけてく ださいました。この努力なしには、本プロジェクトは 成り立ちませんでした。次にかがやきひろば三陽の 指導員西沢淑恵さんです。私が長野ボランティアセン ターの運営委員をしていた時にお世話になったコー ディネーターです。彼女の新職場での活動も本プロ ジェクトにとっては大いに役に立ちました。次に、私 が副会長をしている長野ワイズメンズクラブに対して もお礼を述べます。人や資金を提供していただきまし た。あとは、多すぎて個別に取り上げませんが、ご 協力願った全てのボランティアの方々にお礼を申し上 げます。ありがとうございました。

Peace Bridge Project began in Nagano on August 5th, on the same day the Rio de Janeiro Olympic Games started. Both of them hold out the keyword of "peace." It is said that the origin of the ancient Olympiad was the gathering of the soldiers at Olympia without their weapons, even during a war. Modern Olympics also have departed from this ideal of peace, which Baron Pierre de Coubertin advocated.

However, it happened to our regret at a judo game at Rio Olympic games that an Egyptian judo wrestler refused to shake hands with his Israeli opponent. This Egyptian wrestler was forced to return to his country. Such incident at the Olympics that symbolize peace indicates the extraordinary feud between Israel and Arab states.

This project was founded so as to invite youths from these conflicting parties to Japan and provide the opportunity to ponder the preciousness of life and peace.

If I were from these countries, I would understand the cause of the project but would hesitate to actually join it. Therefore, I truly appreciate the courage of the young participants. However, they surely experienced a lot of confusion during the communal life in Nagano. The communal life experience aimed to bring the youths from three countries closer by spending their time together in the great nature and learning the diversity of people through cultural exchange.

We owe a lot to residents in Nagano who willingly volunteered to support us. When I talked what we were trying to do in Nagano, I felt an aloof atmosphere among the locals: "Israel and Palestine? I don't know a lot about these places but they seem to have a lot of issues." However, they eventually realized that the youths were in Japan to truly seek peace, although the participants did not realize this shift. The locals began to understand that there are warring nations out there in the world while they live in a peaceful environment, and that the whole world should be in peace. It was an unexpected, but a wonderful effect of the project. I am really glad that we had this project in Nagano.

The major feature of this project was definitely its location: home territory of Zenko-ji. Buddhism or Buddhist atmosphere have inevitable resonated with the participants. I am a Buddhist monk. A Buddhist teaching says "In this world, reciprocating resentment with resentment does not terminate resentment. Abandoning it is the only way to terminate resentment. This is the eternal truth." I have thought that this is a teaching that only Buddhists can understand, but it turned out to be a universal truth. After the terror attack in Paris last November, Antoine Leiris who lost his wife said that the perpetrator would not have his hate. "The more hideous the crime is, the more legitimate the hatred toward it becomes. However, if I do not condemn the perpetrator(s), I can sincerely face my grief." I hope this truth spreads to the two countries in the Middle East too.

The latter half of the project was held in Tokyo. We mainly contemplated the topic of peace. The successfulness of the latter half of the project directly reflects that of the first half of the project. Whether the participants were able to be true friends. It is my fifth time to attend the project, but I have experienced variation of atmosphere depending on the conflict-situation. This year' s project was entirely satisfactory. The situation of Israel and Palestine was politically stable in a relative sense. I wondered whether the varying local situation matter for the war has always existed for past decades. I eventually came to a conclusion that this year's participants shared a characteristic of love for singing. I also love to sing and mainly sing Christian songs. This is due to Yacoub's great effort to choose the right people. I previously referred to the Olympics, but I think sports and singing go together with peace. The fact that that Nagano Olympic games in 1998 energized the volunteer activity in Nagano contributed to peace.

One of the participants told me that he could say "peace," which was unthinkable back in Israel, after having had the peace talk in Tokyo. The youths were saying that they were willing to pursue peace in their own ways after returning home. I really hope that their determinations remain unwavering even after landing at the site of conflict, Israel and Palestine. I would like them to recall the memory in Nagano when they face hardships.

In the end, I would like to express my deep appreciation toward Ms. Hitomi Kobayashi, the coordinator at Nagano Volunteer Center. She was integral to the success of the project. She called upon numerous volunteer groups using her connections. This project would not realize without her hard work. Secondly, Ms. Toshie Nishizawa, the leader of Kagayaki Hiroba Sanyou, is the coordinator whom I worked with as one of the committee members of Nagano Volunteer Center. Her work at her new workplace has also significantly contributed to make the project fruitful. I would also like to thank Nagano Wise Men's Club which I serve as the vice president. The Club provided us with man power and resources. Due to space limitation, I cannot list all the names of the volunteers, but I would like to deliver my deep appreciation to them as well. Thank you very much.



信州善光寺玄證院にて、初めての座禅の体験。 First experience of ZEN at Gensho-in, Zenko-ji Temple.



田制 則子 Noriko TASEI

- 認定 NPO 法人 聖地のこどもを支える会理事
- Director of NPO Helping Children in the Holy Land

今年のプロジェクトの資金 調達は容易ではなかった。二 つのチャリティー・イベント(「 イスラエル・パレスチナ・日本 友好のつどい」と「講演会」)、 支援金募集、助成金申請など、 大変な苦労をしても、思うよう に資金は集まらなかった。し たがってスタッフとしては準備

の際には節約と工夫を迫られた。幸いなことに多くの 方の理解とご協力があり、物品を寄付していただい たり、必要なものをお貸しいただいたりしたことを心 から感謝している。

プロジェクト中の食事も大分節約をしたが、玄證 院の賄いの田村さんの協力を得て、贅沢な食事はで きなくても、何とか栄養バランスに配慮した食事を出 すことができた。暑い日に冷えたスイカを出すなど、 あらゆる点でお世話をしてくださった田村さんの心遣 いを大変ありがたく思っている。

長野では、大自然の中でのバーベキューや回転寿司、プロジェクト最終日のフェアウェルパーティーでは、しゃぶしゃぶ食べ放題のメニューがあったので、若者たちは美味しい日本の食事に大満足をしてくれた。

私には忘れられない思い出がある。それは、参加者の一人、イスラエル人で現役兵士のドールの足を洗ったことだ。大きな足だった。玄證院の宿坊の畳を汚さないために、若者たちに玄関先で足を洗うように説明していた時のことである。その彼が、パレスチナの若者で、幼少時にイスラエル軍に住む家を破壊されて家族の一人を失うという体験をしたエリアスと親しく交わっている姿を見て、両民族の和解と平和への希望をかいま見たような気がした。

このプロジェクトにいろいろな形で関わり、支援してくださった皆様お一人おひとりに対し、心からお礼を申し上げたい。

Fund raising for this year's project was not easy. We struggled in collecting sufficient fund, holding two charity events: "Gathering of Friendship: Israel,

Palestine and Japan"and the lecture by Mr. Degawa, making public advertisement for donations, and also applying for subsidiaries. Therefore, the staffs were compelled to cut off costs and wisely use the limited amount of money. Thanks to all who understood our hardship, made donations, and lent us necessary things.

We managed to serve nutritious meals although we did not have ample money to have a feast all the time. Mrs. Tamura, kitchen staff of Gensho-in, has helped us in a great extent. We really appreciated her consideration and care, such as serving cold watermelon on a hot day.

In Nagano, young participants seemed that they really enjoyed BBQ in the great nature, turning sushi, and all-you-can-eat hot pot at the farewell party.

The most memorable experience for me throughout the project was when I washed Dor's feet. Dor was an active member of the Israeli Self Defense Force. He had big feet. The moment came when I was explaining to the participants that they had to wash their feet so as not to bring dirt in the dorter of Gensho-in. Seeing him intimately interacting with Elias who had lost a family member by IDF's air raid, I became hopeful for the reconciliation and peace between the two ethnicities.

I would like to deliver my deep appreciation to each one of you who has supported and gotten involved in our project in various ways.



お年寄りとの交流会に参加した中学生が用意したプログラム (長野三陽福祉センター)

Program of the Communication event made by junior-hi students. (NAGANO SANYO WELFARE CENTER)

浅野 耕二 Koji ASANO

- 認定 NPO 法人 聖地のこどもを支える会 スタッフ
- Staff of NPO Helping Children in the Holy Land

今年の平和の架け橋プロジェクトは、大きな問題もなく無事に実施することができた。これは、善光寺玄證院住職・福島貴和さんと長野市のボランティアの皆さんの温かい協力があったからだ。また、プロジェクト参加者同士もみんなとても仲が良かったこともある。

プロジェクト中に特に印象的だった出来事を紹介 したい。それはとても感動したと同時に、困惑した 出来事でもあった。

長野の戸隠高原での活動を終え、車を運転して宿舎の玄證院に帰る途中のことだった。交差点で赤信号になったので車を止めていると、交差点を渡ろうとする一人の高齢な女性がいた。その方は、倒れては立ち上がりを繰り返し、うまく歩けないでいた。交差点の近くでもあり、とても危険な状況であった。

その状況を見たイスラエル参加者のモールとパレスチナ参加者のエリアスは、すぐさま車から降りてその女性を助けに行った。その方は、夏の暑さの影響もあり体力的に衰弱しており、また足腰も悪いようだった。幸いにも近くにガソリンスタンドがあり、そこの従業員の方に事情を話し協力してもらった。そして、救急車を呼んでもらい、事なきを得たので本当にほっとした。

私は、この様子を見てとても感動した。それは、 その危険な状態にあるお年寄りを見て、いち早く救助に飛び出していったモールとエリアスが、紛争当 事国のイスラエルとパレスチナから来た若者だったからである。

しかし、救助後に彼らから言われたことに、私は ひどく困惑した。

「なぜ、周りの人たちは助けに行こうとしなかったのか?」

私は、この質問に答えることができなかった。その交差点には、信号待ちをしていた車もあった。しかし、誰も駆けつけることはなかった。

平和すぎる日本だからこそ、このような傾向があるのではないか。困っている人がいても誰か他の人が駆けつけるだろう、または面倒にかかわるのは嫌だ、そんな風潮が私たちにはあるのではないか。

今回のプロジェクトで、私は参加者から大切なことを学んだ。正しいことを行動に移す、その当たり前のことを、 今後しっかりと実践していきたいと思う。

ご報告を終えるに当たり、 3か国の参加者をはじめ、支 援者の皆様、協力・応援して

下さった多くの皆様に感謝申し上げます。



Thanks to cooperation by Takakazu Fukushima and many volunteers in Nagano, we could make this project successful without any big problems. Moreover, this success was a result of the good relationship among the participants. I would like to introduce the most impressive happening for me in this project. It made me not only impressed but also embarrassed.

After finishing the activity at Togakushi Hihgland in Nagano, I was driving a car to go back home with some participants. When I stopped the car at the intersection, I saw an old lady trying to cross the crosswalk. However, she fell down and rose up repeatedly at the ground, so she couldn't move forward Looking at that situation, Mor and Elias got out of the car and run up to help her together. She looked like weakened due to summer heat, and her legs had some troubles. Fortunately, there was a gas station nearby, and we asked a staff to call for an ambulance. Then, the ambulance came there, and the worker saved her. So, we were relieved to see her off.

I was very impressed. This is because it was Mor and Elias to do so together. Mor is from Israel, and Elias is from Palestine. Their nations have a significant conflict even now.

But at the same time I was very embarrassed by what they told me.

"Why did not Japanese help her?"

I couldn't answer the question. Indeed, there were some cars stopping at the intersection. However, nobody tried to help her.

Such a tendency of indifference can be seen

sometimes in a too peaceful Japan. Even if we see someone in trouble, we are reluctant to help him or her because we think that someone may do so and because we don't want to involve in a trouble. Do we Japanese have this tendency like the happening in the intersection?

This is an important lesson I have learned from the participants. I will try to move into action to do the right things from now.

As I end this report, I would like to thank each of you, participants and supporters, with all my heart, for your cooperation.

長野からの声 / Voice from Nagano



宮澤 元子 Motoko MIYAZAWA

●ボランティア 長野在住 ● Volunteer in Nagano

イスラエル・パレスチナ・ 日本の素敵な若者たち、 ようこそ日本の長野へ!

私が NPO 「聖地のこども を支える会」とイスラエル・

パレスチナの若者に関わるのは、これで2度目です。 最初は、2、3年前に、当時 NPO 法人のスタッフの 一人であったイタリア人女性ステラを、福島さんから 紹介されて、ともに楽しいひとときを過ごしました。

私は素晴らしいご住職の福島さんを15年ほど前に、井上弘子さんの巡礼旅行にお誘いしました。福島さんにもキリスト教の世界も知っていただきたいと思ったからです。これがきっかけで福島さんはこのNPOと井上さんと関わりを持つようになりました。今やご住職はこのNPOの理事として働き、またいろいろな活動の中でイスラエル・パレスチナと関わり合い、イスラエル・パレスチナの皆さんを最も良く理解している人の一人です。

この度、すてきな若者の皆さんにお会いできてと ても嬉しく思っています。お互いに話し合い、理解し 合ってこそ、未来に進んでいけることを学ばれたと思 います。だから皆さんこそ、平和な世界を作り上げる ことができます。お互いに仲良くして、より良い世界 を作っていきましょう。

Dear youngsters from Israel, Palestine and Japan! Welcome to Nagano in Japan!

It is the second time I am concerned with you, youngsters from Israel and Palestine and the NPO "Helping Children in the Holy Land". The first time was, a couple of years ago, when Rev. Fukushima introduced me an Italian young lady whose name was Stella, one of the staff of the NPO. We enjoyed a nice time together at that time.

Around 15 years ago I had invited Rev. Fukushima, an excellent Buddhist priest, to participate with me to a pilgrimage organized by Ms. Hiroko Inoue. I've wanted him to know also about Christianity. This is how he has come to know her and the "Helping Children in the Holy Land" of which she is the president. Since then, as one of the directors of the NPO, Rev. Fukushima has many times participated to its activities. Now he is one of the best persons who know much about you, Israelis and Palestinians.

You are the persons whom I've wanted to see. You have learned how important to communicate each other. Therefore, I am sure that you, so nice and wonderful guys, will be able to contribute to the peace of the world.

Let's make understanding among us and let's advance for a nice future.

7 名簿 Lists of names

プロジェクト参加者

責任者

井上 弘子

(認定NPO法人 聖地のこどもを支える会 理事長)

イスラエル/パレスチナ責任者・同行スタッフ ヤクーブ・ガザウィ

日本側 スタッフ

井上 弘子 (実行委員長)

福島 貴和師 (実行委員・信州善光寺玄證院住職)

田制則子(実行委員)浅野耕二(実行委員)

Project Participants

General Representative

Hiroko INOUE

(President of NPO Helping Children in the Holy Land)

Responsibles of Israeli and Palestinian Delegation

Ya'coub GHAZZAWI

Japanese Staff

Hiroko INOUE (Director of Executive Committee)

Rev. Takakazu FUKUSHIMA

(Executive Committee / Sinshu Zenko-ji, Gensho-in, Buddhist chief priest)

Noriko TASEI (Executive Committee) Koji ASANO (Executive Committee)

青年参加者

イスラエル

モール・ニクソン	(男)
リオール・レヴィ	(女)
ドール・ベーリ	(男)
リタル・エルカイム	(女)

パレスチナ

カッセム・シャリフ	(男)
ラナ・ランティシ	(女)
エリアス・ハズブーン	(男)

ドミアナ・ジャッセール (女) (イスラエル国籍) ヤラ・ズレイク (女) (イスラエル国籍)

日本

大野田 さよ	(女)
渡辺 まり	(女)
梶原 裕史	(男)

Young Participants

Israel

Mor NIKSON	(M)
Lior LEVI	(F)
Dor BEERI	(M)
Lital ELKAIM	(F)

Palestine

Kassem SHARIF	(M)
Lana RANTISI	(F)
Elias HAZBOUN	(M)
Domiana JASSER	(F) (Israeli Nationality)
Yara ZREIK	(F) (Israeli Nationality)

Japan

Sayo OONODA	(F)
Mari WATANABE	(F)
Yuji KAZIWARA	(M)

協力団体、協力者

イスラエル、パレスチナの共催団体

中東のための ヨハネパウロ II世 財団 (理事長 イブラヒム・ファルタス神父)

日本での協力団体、協力者

後援

独立行政法人 国際協力機構 在日イスラエル大使館 在日パレスチナ常駐総代表部 長野県庁

助成

公益財団法人 三井住友海上文化財団

協力

信州善光寺玄証院 東京都生活文化局 国際市民プラザ 株式会社フランストラベルセンター 長野市ボランティセンター デイサービスセンターながでんハートネット桜枝町 長野三陽福祉センター 幼きイエス会 (ニコラ・バレ) カトリック吉祥寺教会 ミハル・イラン(在イスラエル・サンマリノ名誉総領事) ナオミ・ファラン (イスラエル・モラン合唱団指揮者・音楽監督)

講演会、チャリティー・イベント 出川 展恒(NHK 解説委員) 家田 紀子(藤原歌劇団 ソプラノ歌手) 瀧田 亮子(ピアニスト)

シャディ・バシイ

(アルミーナ/アルディワン オーナーシェフ)

Collaborators

Co-organizer in Israel/Palestine

John Paul II Foundation for the Middle East (Fr. Ibrahim FALTAS, President)

Sponsorship in Japan

Supported by:

Japan International Cooperation Agency Embassy of Israel in Japan Permanent General Mission of Palestine in Japan Prefecture of Nagano

Subsidized by:

Mitsui Sumitomo Insurance Cultural Foundation

Cooperated by: Shinshu- Zenko-ji Gensho-in Bureau of Citizens and Cultural Affairs Citizens' International Plaza France Travel Center S.A. Nagano Volunteer Center Day Service Center Nagaden Heart Net Nagano Sanvo Welfare Center Nicolas Barré Catholic Church of Kichijoji Michal Ilan (General Consul of San Marino in Israel) Naomi FARAN (Conductor & Music Director of Moran Choir in Israel)

Cooperators for Seminar, Charity Events

Nobuhisa DEGAWA (NHK News Commentator)

Noriko IEDA (Fujiwara Opera)

Rvoko TAKITA (Pianist)

Shadi BASHIYI

(Owner Chef of Al-Mina/Al-Diwan)

順不同

(In random order)

支援団体と支援者 / Donators

一般支援団体(3団体) Organizations

お告げのフランシスコ姉妹会ナザレ修道院 御聖体の宣教クララ修道会 Projects.etc.JP

一般支援者(71名) Individuals

Harvey Paul A.S.	大西 茂雄
アントニオ・ツゲル神父	大幡 順子
荒川 淑	大野 直美
有田 美江	柿添 正男
伊藤 多恵子	角 加代子
井上 英彦	川嶋 治彦
井上 弘子	川本 和子
石黒 朝香	北原 豊子
池端 千代	木村 浩之
飯島 喜久江	木村 治子
宇野 節生 順子	郷家 かな江
遠藤 久夫	佐藤 光子
遠藤 恵美子	島田 ミサオ
遠藤 香恵子	鈴木 サワエ
岡 晶子	鈴木 登喜子
小川 千枝子	高岡 節子
小野 修	高平 たつみ
太田 輝男	田口 穣一郎

田制	則子	本間 早苗
田制	忍	真山 かほる
田村	久恵	宮川 園絵
田中	博	宮田 靖子
戸澤	華江	森本 俊子
戸井	利子	森本 明子
中村	満	山田 康子
内藤	歌子	山田 真理子
内藤	千恵	山本 恵美子
西田	百合子	山本 勝也
英	隆一朗 神父	柳田 和佐
花田	俊信	横道 たきよ
華山	京子	米嶋 洋子
橋本	和子	ワタナベ レイコ
藤井	明子	渡部 朋子
福瀬	くに子	渡辺 こずえ
福島	暁和	渡辺 禮子
細谷	彬	

(敬称略)



8月6日広島の「平和祈念式典」をテレビで見て祈ったあと、3カ国の若者が折った折り鶴。 Folded paper cranes made by the youngsters of the 3 countries after having watched on TV the Ceremony for Peace in Hiroshima on the 6th of August.

PROJECT REPORT

イスラエルーパレスチナー日本 平和の架け橋プロジェクト in 長野 2016 報告書



善光寺の池に咲く蓮の花。 A lotus flower in the pond of Zenko-ji Temple.

編集スタッフ Editorial Staff

井上弘子Hiroko INOUE浅野耕二Koji ASANO佐藤克裕Katsuhiro SATOH

翻訳協力 Translation Stafff

中尾有希 Yuuki NAKAO 斎藤 鉄也 Tetsuya SAITO

写真提供 Photographers

井上弘子Hiroko INOUE福島貴和Takakazu FUKUSHIMA浅野耕二Koji ASANO佐藤克裕Katsuhiro SATOH

平和の架け橋プロジェクト in 長野 2016 実行委員会

認定NPO法人 聖地のこどもを支える会

〒164-0003 東京都中野区東中野5-8-7-502

TEL & FAX 03-6908-6571
URL http://seichi-no-kodomo.org
E-mail ispalejpn@gmail.com

発行日 2016年12月1日

John Paul II Foundation for the Middle East Hebron Jerusalem Street 475, P.O.Box 24 Bethlehem

TEL (972) 2 274 55 57 FAX (972) 2 275 24 97 URL www.jpii.ps E-mail info@jpii.ps





